

New Horizons

Teaching **S**kill **U**p



2017年3月

神戸大学・関西学院大学・兵庫県立大学

本冊子の刊行にあたって

神戸大学男女共同参画推進室長・教授 坂本 千代

神戸大学・関西学院大学・兵庫県立大学は文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業（連携型）」の補助金を得て平成26年度から3年間、女性研究者支援のために様々な活動をしてまいりました。その中の一つに、教育経験の少ない若い教員のためのティーチングスキルアップ（TSU）セミナーがあります。従来のセミナーでは、教育方法に定評のある何人かの先生方を講師にお招きして、実用的な面白いお話をさせていただくなど、大変有意義なセミナーを実施してまいりました。

このたび、これまでのセミナーを基にしつつも、さらにより多くの先生方の体験を基にしたティーチングについての技術やアドバイスを広く知ってもらおうという趣旨で本冊子を作ることになりました。いろいろ検討の結果、神戸大学大学教育研究推進室にも協力を仰ごう、アンケートだけでなくインタビューも入れよう、講義の際の声量について専門家にも寄稿していただくということになり、最終的にこのような形で刊行することになりました。

自分自身のことを振り返ってみると、30年近く前に神戸大学に教員として赴任した当時、私は大学教員としての「心構え」「教える技術」などをほとんど持っていませんでした。教科書の選定や授業の進め方などは、自分が学生の時に受けた授業を一生懸命再現することからはじめました。まさに試行錯誤の連続で、当時の学生さんには申し訳ない気持ちがあります。今から思うと、もっと合理的で効率的な授業のやり方があったのではないかと、ほかの教員にいろいろ聞いておけばよかったのにと思うことが多々あります。しかしながら、当時は身近に知り合いもほとんどなく、また、あまりに基本的なこと（板書の仕方、出席を取るタイミング、成績のつけ方・・・）をいまさら同僚に聞けないという雰囲気でもありました。それらについては、年月とともに私も何とか自分なりのやり方を見つけてきました。そして近年、職場に女性教員が多くなってきて、彼女たちと話をする機会が増えると、文系と理系ではかなり状況がちがうものの、新米の女性教員の方々は男性とはまた別の悩みがあることがわかりました。今回のアンケートはそのような声を拾い上げることも目的としました。

このささやかな冊子が若手のみならずベテランの教員や研究者の方々のTSUのお役に立てば、私たち編集者一同にとってこれほどうれしいことはありません。

New Horizons 「Teaching Skill Up」

目 次

本冊子の刊行にあたって

神戸大学男女共同参画推進室長・教授 坂本千代

第1章 寄稿「私のTSU」

- 「よりよい講義のために」
 神戸大学大学院経済学研究科教授 衣笠 智子 … 7
- 「ICTを活用した反転授業の導入と効果」
 関西学院大学国際学部教授 木本 圭一 … 10
- 「アクティブ・ラーニングを目指して」
 兵庫県立大学環境人間学部准教授 竹内 和雄 … 13

第2章 インタビュー「教えること、学ぶこと、生きること～6人の素敵な先生との対話～」

- 「工夫を重ねてたどり着いた指導方法」
 神戸大学大学院農学研究科教授 ツェンコヴァ・ルミアナ … 19
- 「文理融合と多言語間のコミュニケーションを求めて彷徨う」
 神戸大学大学院国際文化学研究科教授 林 良子 … 24
- 「出会いにひかれて」
 関西学院大学教育学部教授 日浦 直美 … 30
- 「教員生活15年を振り返って」
 関西学院大学経済学部教授 西村 智 … 35
- 「看護学部のなかの、男性教員として、教養系教員として
 一性を意識せずに関わる」
 兵庫県立大学看護学部准教授 池田 雅則 … 39
- 「無意識の思い込みと心の壁」
 兵庫県立大学経営学部教授 横山 由紀子 … 45
- 「6人の素敵な先生との対話を終えて」
 インタビュアー：神戸大学大学教育研究推進室室長 米谷 淳 … 51

第3章 ティーチングスキルアップアンケート 53

第4章 教員仲間に伝えたいこと、勧めたいこと 61

付録. 技術ノート「あなたの声量は十分ですか？」

携帯端末を用いた講義時の聴きやすい声量のチェック方法

神戸大学大学院工学研究科准教授

佐藤 逸人 … 76



第 1 章

寄稿 「私のTSU」

神戸大学、関西学院大学、兵庫県立大学それぞれの大学において、ティーチングスキルが高く評価されている先生方に、講義方法等ティーチングスキルアップについて寄稿いただきました。

よりよい講義のために

神戸大学大学院経済学研究科教授 衣笠 智子

私が初めて大学で教えたのは、2004年でしたので、もう、それから10年以上も経ってしまいました。最初のうちは、資料作成に必死で、学生の反応も予想できず、戸惑っていました。しかし、講義をすることは、かなり慣れでカバーできるものであると感じています。一方、講義は、毎回、その時の状況に応じて、二度と同じ時はなく、試行錯誤の繰り返しだとも痛感しています。まだ私の講義はベテランからはほど遠く、少しずつ精進しようとしている過程ですが、その中でも、少しでも、新しく講義をされる方のお役に立てればと思い、この原稿を書かせていただくことにしました。

講義をするにあたって、まず、話し方や教えるということの基本は押さえるということが必要かと思います。世の中には、効果的なスピーチやプレゼンテーションのマニュアル本やホームページがたくさんありますので、それを数点でも読んで、話し方や教え方の基本を学ぶことは必要かと思います。どなたでもご存知かもしれませんが、やはり、はっきりと聞き取りやすく話すこと、聴衆を見ること、黒板やスライドばかりを向いたりして、聴衆に背を向けないこと、などを、気を付けるべきことではないでしょうか。また、マニュアルだけでは、それぞれの分野の個々の状況に対応できませんし、それぞれの人の個性や得意な点を生かして、自分ならではの講義を組み立てていくことが重要だと考えています。ここで、マニュアル本に整理して書かれてあることならば、それを読む方がわかりやすいかと思いますので、私自身の感じた裏話的な話を書こうと思います。自分の体験や主観に基づくことになりますが、少しでも参考になると幸いです。

私は、講義において重要なことは、準備、熱意、誠意の三要素だと思っています。この三つの詳細について説明したいと思います。まず、準備についてですが、入念な準備をすることが良い講義を作り上げる第一の条件だと考えています。私は、シラバス作成から講義は始まっているという気持ちで、講義をイメージしながらシラバスを作ることが重要です。講義の目的を明確にし、体系をしっかりと考えています。それから、講義のルール、すなわち、採点基準や講義のルールなどを具体的に考えておきます。講義計画を立てる際に、注意すべき点は、無理のない計画であるかということかと思っています。例えば、大講義室で多くの学生を相手にするのに、ティーチング・アシスタントが配置できる時間が限られている場合、小テストや宿題を頻繁にしすぎると、自分が処理できなくなってしまいます。また、私が講義に慣れていない頃は、あれも教えてあげたいこれも教えてあげたいという思いで、講義内容を考えると、結局時間が足りなくなったこともありました。充実した講義を作りたいという気持ちは重要なことですが、後でできないような講義になってしまうと元も子もありません。特に、初回は、講義ノートから作成するので、非常に時間がかかりますので、シンプルでオーソドックスな講義をデザインし、徐々に自分の味を出していくといいかもしれません。

シラバスができましたら、講義資料や講義ノートの作成に取り掛かります。その中で、まず、パワーポイントを使うか、板書を中心にするか、あるいは、配布資料に沿って講義を行うか、決める必要があります。どれにするかはそれぞれの講義の特徴次第になるかと思いますが。私が、ティーチングスキルアップセミナーでお話しした時には、板書が手を動かして書くため、パワーポイント等よりも理解しやすいのではないか、と言いましたが、これも、近年、ほとんど全ての学生がスマートフォンを持っていて、板書を写真で撮るといった行為が横行するようになったので、必ずしもこれがいいとは言いきれません。時代の流れに合わせた工夫が必要かと思いますが。講義資料ですが、最初はあれも話さなければならぬ、これも話さなければならぬと思って詳しい資料を作る傾向にあると思いますが、やはり、分かり易さは意識した方がいいように思います。特に、学部生は、ほとんどその分野についての知識がないので、詰め込みすぎないように配慮も必要だと思います。

講義資料は、2回目以降は、過去のものを使い回すこともあると思います。その際、必ずデータの更新が必要でないか、チェックをすることが重要かと思いますが。私の講義に限ってのことかもしれませんが、大抵、私の講義は、最初に現状を説明してから、それを説明する理論を説明します。ですから、初回数回分の講義の準備は、その後の講義の準備より、遥に時間がかかります。講義が始まる前からしっかりと準備することが大切だと思います。それから、時間配分を考えた講義資料を作るといいと思います。私がまだ講義になれていない頃は、詳しい資料を作りすぎて、予定していた内容を教え切れずに講義が終わってしまったこともありましたが、慣れてくるとその問題も少なくなりました。

それから、講義の教室はしっかりと確認しておいた方がいいと思います。もし、初めて使う教室ならば、下見はするべきかと思いますが。教室は黒板なのか、ホワイトボードなのか、4面黒板なのか、1つの横に長い黒板なのか等によって、講義のイメージは異なると思います。また、ドアの位置も重要で、遅刻者がどこから入ってくるのかはイメージし、前にしかドアのない教室ならば、遅刻した人が入ってもなるべく目立たない工夫を考えるなど考慮する必要があるかと思いますが。それから、マイクも線の付いたものか、ワイヤレスか、ピンマイクなのかで、自分の得意、不得意も出てくると思います。照明やエアコンも、問題があると授業振り返りアンケートで不満が出やすいので、どう調整すればいいか、把握しておくといいと思います。

準備について長く書きましたが、続いて、第二点目の熱意についてですが、授業振り



返しアンケートにも、熱意についての項目もあり、講義の印象で重要なものだと思います。これは、講義でどのように示すことができるのか、私なりの考えを述べさせていただきます。まず、熱意が重要な項目なのな

ら、学生の前で何等か「熱意」というキーワードを使って話すことです。例えば、「私は、熱意を持って授業に取り組んでいきたいと思います」などと言うようにします。それから、学生の方を見て大きな声ではっきりと話すこと、チャイムが鳴る前から準備をして、規律よく講義を開始したりすること、丁寧に板書すると熱意が伝わりやすいのでは、と思います。また、文字通り熱くなるというのが自分のパターンで、夏なら汗をかきますし、冬でも温かくなるので、普段は寒がりです服を着込みますが、講義の時は、最低1枚は普段より重ね着を少なくするようにしています。

第三点目の誠意については、これも、熱意の場合と同様、誠意をもって接したいということダイレクトに学生に話すことも効果的かと思います。それから、叱るときは叱っても、フォローを入れることが重要かと思います。また、マイクの音量がきちんと聞こえているか、板書は見えるか、空調は適切かなど、適宜尋ねるようにし、学生を気遣うように気を付けています。

最後に、講義に関係するとき留意すべき点として、思いついたことを順不同で書いていきます。まず、いろいろな学生がいることを想定することは非常に重要だということです。常に個別配慮の交渉が来ることは念頭に置いておいた方がいいように思えます。交渉の中には、本当に配慮すべきものもありますが、これを受け入れるとどうしようもないというものもあります。しっかりとルールを決め、冷静に対応することがポイントかと思います。それから、学生の評価は非常に厳しいということは意識しておいた方がいいように思えます。多くの学生に見られて講義をしているので、手を抜いたり問題があったりしたところは、必ず誰かが授業評価で指摘をされると感じてきました。たとえ、学生側の態度が良くなかったり、真面目に勉強をしていなかったりすることがあっても、自分は教育者としてきちんと講義をする、という意識を強く持つことが重要なのではないかと考えています。それから、講義には、うまくいかないことや、失敗することもつきものだと思います。失敗したり、思ったように学生の反応がなかったりしても、くよくよせず、次の講義に向けて気持ちを切り替えることが重要かと思います。

この文章を読んでくださった皆様、ありがとうございました。機会がありましたら、是非意見交換をしてみたいと思います。実際ティーチングスキルアップセミナーでお話しさせていただいたとき、その後の意見交換で出たご意見は、大変勉強になりました。ご質問、ご意見等ございましたら、遠慮なくご連絡下さい。

衣笠 智子先生（神戸大学大学院経済学研究科教授）

1998年 神戸大学経済学部卒業
 2000年 神戸大学大学院経済学研究科博士課程前期課程修了
 2000年 神戸大学大学院経済学研究科助手
 2004年 University of Hawaii, Ph.D. in Economics
 2004年 神戸大学大学院経済学研究科講師
 2006年 神戸大学大学院経済学研究科助教授
 2007年 神戸大学大学院経済学研究科准教授 2016年より現職



ICTを活用した反転授業の導入と効果

関西学院大学国際学部教授 木本 圭一

1. はじめに

2016年度、本学高等教育推進センターからBest Contribution 賞をいただいた。この賞は、同センターの目的である「教育力を強化し、教育の質を高めることにより、教育の一層の充実・発展に寄与すること」を推進するのに貢献した者を対象として、その貢献を称えるものと伺っている。私の受賞理由は、TurningPoint を使った小テストを実施する等ICTを活用し、反転授業を実施することによって、学生の理解度の把握や成績評価に活用した点にあるとの連絡を受けた。

そこで、本稿では上記の活用事例について述べる。ICT活用や反転授業実施を検討されている先生方に一助になれば幸いである。

事例として、本学部で開講している「会計学基礎」について述べる。本学部では、会計諸科目の基礎となっている簿記が必修となっていないため、基礎概念の修得も当該科目の教育目標に含まれる。そのため、半期の授業時間では十分な修得をさせることが非常に難しい。

開講(学部開設)4年目の2013年度には、おもて面に勘定科目名、裏面にその意味と区分を記した単語カードを教材とし、あたかも英単語を暗記するようにカードで修得できるような工夫も行った。それでもなお、半期2単位15回の授業回数で、上記の教育目標の内容を講義するのが精一杯であり、受講生は消化不良であることは実感していた。

2. 教育改善の内容と方法

開講5年目の2014年春学期に、新たな授業方法として、ICTを活用した反転授業を取り入れた。2014年9月に私情協ICT活用事例報告で発表し、そこでの示唆を踏まえ、2015年春学期に以下のように改善した反転授業を行った。

その方法は、修得すべき内容を各回予習し、授業で確認テストを行い、授業時間はその内容に関する質疑応答とグループワークに充てるというものである。

テキストを読んで予習してくるとしても、初学者は自習がかなり難しい。そこでビデオ教材として音声入りパワーポイント教材を基本的に活用することにした。すなわち、それまでに講義で用いていたパワーポイントファイルに音声で解説を吹き込み、mp4ファイルに変換したものをを用いた。

受講生は、本学で導入されている各授業科目のファイル配布システムを使って、このビデオをダウンロードし、解説ビデオとテキストを使って、単元を毎週予習し授業に臨む。授業の最初は、毎回予習した単元に関する質問を受け付ける時間とし、その後、4択また

は5択の選択問題ミニテストを実施した。TurningPointとクリッカー（パワーポイントで問題を表示し、受講生の手元にあるクリッカーで各自の選択番号を集計できるシステム）を使って、毎回10問行った。各問解答後、正答率表示を行い、解説も同時に行っている。この時にもそれぞれの質問を受け付けるようにした。ミニテスト・解説・質問は毎回、合計で約15分～20分程度である。

残りの授業時間は約70分程度になる。単元の進度に応じて異なるグループワークを実施した。授業の6回目までは、勘定科目の修得に焦点を合わせた演習を行った。具体的には全員に配布している単語カード（シートを各自でカードにするように指示）の並べ替えや、かるたのような形式での演習である。7回目から10回目までは、財務諸表の理解が深まるようなテーマを与えて、グループ・ディスカッションを行った。11回目以降は、実在企業財務データに基づく財務諸表を読み込むグループワークと、財務諸表分析比率を算出し企業を比較する演習を行った。

2014年度は70分すべてをグループワークのみにあてていたが、2015年度は50分程度のグループワークの後、10分から20分程度、翌週の単元のポイントを解説するようにした。

以上をまとめると、反転授業のインプットとして授業開始までにビデオ教材とテキストによる修得、アウトプットとして確認テスト・グループワーク・演習、さらにインプットとして翌週の単元のポイント概説となる。反転授業と確認テストにICTを活用している。

3. 教育実践による改善効果とその確認

(1) 学年末試験による改善効果

最終試験を受験した実受講者は、2013年度40名、2014年度26名、2015年度39名である。

2015年度は2014年度に比べて、高得点領域での得点者が少し多く、低得点（45点から49点）のところも少し多い。平均点については、2013年度が62.15、2014年度が64.57、2015年度は67.38と大幅に向上した。

毎回のミニテストは各年度とも、大阪商工会議所主催のビジネス会計検定3級に準拠して、同様のレベル・出題量で実施している。したがって、出題レベルによる差はない。

(2) 授業評価（自由記述）

授業評価自由記述では、2014年度には次のような不満が記されていた。「ビデオとは言いながら、テキスト準拠で音声解説しているだけでは、会計の諸項目を学ぶには難しい。」「初めて学ぶ者に対してもう少し丁寧な解説がないとわからないままミニテストに臨むことになる。」

2015年度は、それに相当する不満についての記述はなく、2015年度に



実施した授業終わりの解説によって、前年の不満は解消されたことが伺える。

(3) 授業評価（選択）

反転授業を導入していなかった2013年度より、導入した2014年度および2015年度の「全体としての授業の満足度」および「担当者の工夫」が低い。その要因として、次のように考えている。

教室で担当者の講義を直接聞いておれば、能動的に修得の努力を払わなくても内容についてある程度理解が進むのに対して、反転授業ではかなり意識して予習を行わなければ内容を修得できない。もし予習を怠って教室に来れば、確認テストでは満足いく得点は得られないし、予習内容を前提とする教室内でのアウトプット（グループワークや演習）も満足いくものにならない。

また上記2項目は2014年より2015年度の方が上昇している。これは、授業終わりに翌週の解説を加えるようにしたため、「担当者の工夫」の評価が高まったと思われる。

反転授業導入前より導入後の方が「時間外学習」も「取組みの積極性」も高い。これは上述のように、反転授業では予習を行ってこなければ平常評価も低くなるし、そもそもアウトプットを行う授業に満足いく参加ができないためである。

また、2014年度より2015年度の方が、それら二つの評価が低い。それは、授業時間終わりに翌週の単元ポイント解説を行ったので、受講者の努力が減ったために上記の評価が下がったと考えられる。

4. おわりに

最後に、予習教材のビデオ活用の留意点について述べておきたい。それは、授業中のリアルな講義であれば受講生の反応を見ながら講義内容の難易・強弱をつけることができるが、ビデオ教材を作って視聴し予習させる方法ではそれができないことである。受講生の理解度にあった教材を作成できるかが、反転授業の鍵である。

また反転授業を実施するためには受講者に一定水準以上の学習意欲が必要である。本稿では、ICTを活用し一定の効果をあげた手法を紹介したが、予習をあまり行っていない受講生がなお一定数存在する。予習のためのWEBテストの活用がその解決策の一つと考えている。今後の検討課題としたい。

木本 圭一先生（関西学院大学国際学部教授）

1983年関西学院大学商学部卒、1988年同大学院修了後、近畿大学講師・助教授を経て、1997年より関西学院大学商学部助教授、2010年より現職。研究テーマは会計基礎概念論、会計情報分析。宝塚活性化プロジェクトの他、文科省や経産省採択のプログラムなどの責任者を務め、産学連携事業も数多く担当してきた。コンピュータを活用した教育については、大学院生の頃から携わり、関西学院大学の企業財務データ分析プログラム開発者の一人でもある。



アクティブ・ラーニングを目指して

兵庫県立大学環境人間学部准教授 竹内 和雄

1. はじめに

兵庫県立大学環境人間学部の竹内和雄です。今回は、私がふだん、講義で工夫していること等を紹介させていただきます。私は中学校国語科、英語科教員としての20年間勤務経験がありますが、大学教員としてはまだ5年目で、素人の域を脱していません。私のまわりの先生方は、アカデミックなハイレベルな講義をされておられますが、私にはまだできません。これまでの経験を総動員して、諸先生方に少しでも追いつきたいと5年間、模索してきました。私なりの途中経過として、現代教育論（2年時配当）での工夫を中心に記載します。

この講義を組み立てるときに重視したのは、「アクティブラーニング」「グループワーク」「調査研究発表」の3点でした。学生自身が問題設定し、グループで調査研究。それをできるだけわかりやすく発表させることにしました。特に、「できるだけグループで協力する」「他のグループの発表から刺激を受けさせる」ことに重点を置きました。

2. 講義の実際

1) アイスブレイクからグループ分け

講義の中で細心の注意を払ったのは、雰囲気作りです。この講義は後期の1時間目開講で、寒い冬の朝です。学生たちは凍えそうな感じなので、アイスブレイクに力を入れました。

この講義では、「ハイタッチ¹」「ひたすらジャンケン²」等、雰囲気を和ませるものと、「積み木自己紹介³」等の集団の凝縮性を高めるものを組み合わせて実施しました。アイスブレイクの内容によって、学生の取り組む姿勢が目に見えて変化することがわかってきたので、今後の工夫が必要と思っています。アイスブレイクの流れで、6人弱のグループを結成します。ふだんは4人程度のグループ構成でやることが多いのですが、この授業では、調査が力点の1つなので、調べ物と発表の内容を考え、6人班にしています。

講義のさまざまなこと（出席管理やコメントカード回収等）を班単位で実施し、班長に

¹ 5人程度の人とハイタッチをする。その際、できるだけ大きな声で「イエーイ」等の声を出す。

² 3人に勝つまでジャンケンをし続ける。3人に負けるまで、3人と「あいこ」等のバリエーションもある。

³ 「蜜柑が好きな竹内です」と一人が言うと、隣は「蜜柑が好きな竹内の隣の、林檎が好きな山本です」。さらに「蜜柑が好きな竹内の隣の、林檎が好きな山本の隣の、豆腐が好きな鈴木です」のように、自己紹介を積み木のように重ねていく。構成員全員一周できれば終了。途中で間違えると、その人から再度開始。

責任を持たせています。班単位での授業構成は予想以上に効果的なことがわかってきたので、今後も取り入れていくつもりです。

2) 調査研究テーマ決定

①自分たちで内容決定（KJ法的なワークショップ）

学生たちの意欲を高めるためのキーワードの1つは、「自己決定」だと思っています。本学の学生たちは真面目なので、教員が決めたテーマでも、わりと意欲的に取り組みますが、自分たちで決めたテーマを自分たちで調査研究するとより意欲的に活動することがわかってきました。そのため、テーマ決定にじっくりと時間を取るようにしています。2年生配当で、教員を目指していない学生も多数いるので、まず教員が「現代教育の現状と課題」を丁寧に講義します。その後、各自の問題意識を書かせます。ここで学生たちがどんなことを書くかが授業の成否の鍵です。学生が書いたものを次時に紹介しますが、教員の講義以上に、仲間の声に刺激を受ける学生が多いです。

その後、各班で付箋を使って、テーマ決定の話し合いをします。班員それぞれが自分が興味のある教育課題を付箋に10個程度書きだし、模造紙に貼っていきます。それを班員は認で5～6個のカテゴリー分けし、最終的には、自分たちが取り組むテーマを決定します。決定したテーマを各班は全体に発表します。発表内容は全員で相互評価させ、教員も良いところを見つけて褒めるようにしています。他の班から最も良い評価を受けた班には、簡単な賞状伝達する等、次への動機付けのための工夫をしています。

3) 調査研究

①2回の発表

自分たちで決めた課題について、各班で調査研究し、発表させます。2回の発表に取り組みさせますが、1回目は、講義受講者対象のアンケート調査を必須にし、アンケート分析と発表の雰囲気をつまませます。1回目で雰囲気を掴ませ、2回目にそれぞれが改善しながら調査を進めます。

②2回目の発表での追加要求

2回目の発表では、調査対象を受講生内から受講者外にも広げさせます。これまでは学内の友達等に応える場合が多かったのですが、最近はSNS等の普及もあり、ネット調査をする学生も増えています。また、「現代教育」を大きなテーマにしているのも、児童生徒、教員や教育委員会等への聞き取り等を希望する学生もいるので、そういう場合は、教員のネットワークの中で対応しています。

また1回目の発表がパワーポイントを使った発表に終始するケースが多いので、写真や動画等を使ったものにするようにさせています。今時の学生たちなので、効果をすぐに理解して良いものになります。言葉の使い方や聴衆を巻き込んだプレゼン方法等も提案することで、より質の高いものになることも多いです。さらに、2回目は文献等を参考にさせ、より学術的なものを意識させます。

3. より良い調査研究にするために

1) 評価方法

学生同士に相互評価させることに力を入れました。「調査内容」「発表の工夫」等で評価させます。全員で集計し、最も得点の多い班を全員で褒め称えます。

さらに、教員がそれぞれの班の良い点（調査内容、発表の工夫等）を全体に説明します。この行程が実は非常に重要で、これがないと学生たちは、パワーポイントのアニメーション等の工夫に終始してしまいます。

2) 活動場所の確保

それぞれの活動をするのに適した環境を用意することに教員として腐心しています。そのため、活動は「大講義室」「机が移動できる教室」「パソコンが使用できる教室」の3つの教室で行います。教員が全体に教えるときは、大きなスクリーンと音響システムが完備した「大講義室」、グループワークをするときは机を移動させることができる「机が移動できる教室」、学生たちがパワーポイント作成や動画編集のため、パソコン使用を必要とすることが予想されるときは「パソコンが使用できる教室」を確保しておきます。



3) PDCAサイクル

3回の発表で、学生たちにはそれぞれ自分たちの発表について反省させます。それを次の発表に活かすように仕向けています。いわゆる「PDCAサイクル」を意識させることです。学生たちは、他の班の良い発表を見て、自分たちの班の発表の反省をして、より良い発表を組み立てていきます。

4. 課題と展望

現代教育論も5年目が終わろうとしているので、最初の講義からはだいぶ改善されてきたが、まだまだ課題が多いのが実情です。以下、課題と展望を記載します。

1) 学術的なフィードバック

2年生配当で、しかも教職を目指さない受講生が多いので、専門知識が乏しい学生が多い。そのため、より学術的なフィードバックが必要ですが、時間の関係もあり、なかなかうまくいきません。毎年、8班程度が発表し、それぞれが自分でテーマ設定するので、教員の明るい分野ばかりでないで、このあたりが難しいところです。わたしなりに精一杯対応していますが、どうしても場当たり的になってしまうこともあります。例えば数年前に「給食」をテーマに調べた班は、メニューと調理方法を中心に調べましたが、今年のあ

る班は調べていくうちに、最終的に「給食費未納問題」に行き着きました。学生たちと調整しながら講義を組み立てていますが、結果的に発表当日にそのあたりについて学生から質問があり、十分な対応ができず、反省しきりでした。

2) 90分×15回、しかない

オリエンテーションを含めて15回しか講義がないので、時間との闘いになります。

「アクティブラーニング」を目指して授業を15回で完結させるのは、難しいです。学生自身の問題意識を大切にしたいグループが目標ですが、どうしても教員からの提示が増えてしまいます。また、アイスブレイクの重要性は前述の通りですが、90分の授業の中で最初の10分程度を使ってしまうため、講義最後のまとめの時間が取りにくくなることが多い。このあたりも課題です。

3) 質の高い発表

とはいえ、学生たちの発表は年々、質が高くなっています。先輩の発表を見させていることが刺激になっていると思います。全体的な傾向としては、当初は、パワーポイントを使った文字中心の発表が多かったのですが、だんだんと写真等の画像になり、さらに動画と進んでいます。学生たちのスマホ等でそういうものに慣れてきたことも多いと思います。発表でより動的なものが聴衆を引きつけることに気づきだしたことも大きいと感じています。

さらに、最近は、パワーポイント自体使わず、紙芝居や寸劇等、リアルタイムでの発表が増えてきていますが、そういう発表に対して、「時代に逆行しているようで、実はとても新しい感じがする」と多くの学生が高く評価しています。この講義の一つの成果だと感じています。

5. おわりに

以上、現代教育論での工夫を材料に、私なりに講義について記載してみました。成果よりも課題が大きいのが実情ですが、皆様の反面教師程度にはなるかなと願っています。

竹内 和雄先生（兵庫県立大学環境人間学部准教授）

兵庫県立大学環境人間学部准教授。公立中学校で20年生徒指導主事等を担当（途中、小学校兼務）。市教委指導主事を経て2012年より現職。生徒指導を専門とし、いじめ、不登校、ネット問題等、「困っている子ども」への対応方法について研究している。文部科学省、総務省、警察庁等で、子どもとネット問題等の委員を歴任。学校心理士、ピア・サポート・コーディネーター、ウィーン大学客員研究員。



第2章

教えること、学ぶこと、生きること
～6人の素敵な先生との対話～

● 工夫を重ねてたどり着いた指導方法 ●

TZENKOVA ROUMIANA先生

(神戸大学大学院農学研究科教授)

ブルガリア生まれ

1985年工学博士を取得、ルセ大学助教、1990年北海道大学及び帯広畜産大学で研究生、1996年農学博士（帯広畜産大学）取得、神戸大学農学研究科准教授、1998年日本近赤外学会賞を受賞。2005年 Aquaphotomics という新しいオミクス研究分野を提唱。2006年より現職、Tomas Hirshfeld International 近赤外分光法賞を受賞



米谷 淳（以下、米谷）：まず、ツェンコヴァ先生の御出身はブルガリアですが、子どもの時から大学や大学教育、あるいは工学の研究に憧れがありましたか。

ツェンコヴァ・ルミアナ（以下、ツェンコヴァ）：はい。ブルガリア大学2年生のとき、「あなたは将来何になりたいのですか」と聞かれ、「大学の先生」と答えたことを覚えています。今、振り返ってみると、ノーアイデアだったのに、ストレートに答えがでた自分にびっくりしています。

米谷：ブルガリアの大学では何を研究されていましたか。

ツェンコヴァ：工学部で自動制御（オートマティックス）の研究です。

米谷：ブルガリアは酪農が有名ですが、最終的に酪農とか農業に関係することをおやりになろうとしたのでしょうか。

ツェンコヴァ：1980年代のブルガリアでは、農業の分野、特に畜産において自動制御とかロボティックス、搾乳ロボットが研究されていました。当時、私はその分野の国際学会をオーガナイズしたこともありました。

米谷：そうですか。ところで、将来大学の先生になろうと思ったきっかけは何でしたか。例えば、ロールモデルがいましたか。

ツェンコヴァ：大きく影響したのは私の両親ですね。父は、エンジニアで特許をたくさん持っており、新しいことを考えるのがとても好きでした。また、母は、大学の研究者に憧れていたのか、知り合いがロシアに留学している、研究しているといった話題を、世間話の中で楽しそうに話していた記憶があります。そのような両親の雰囲気、いつの間にか私を研究者の道へと導いたのかもしれませんが。

米谷：先生が学生だった1980年ごろの東欧は、ロシアの影響が強かったと思うのですが、モスクワでも研究をされたのですか。



Aquaphotomics 学会のシンボルを持って

ツェンコヴァ：はい。モスクワでは、近赤外線分光の研究をテーマに博士論文を書きました。私のマスター論文は、ブルガリアの大学院でヨーグルトが固まるための温度センサーのシステムの研究でした。ちょうどその頃、ミルクの品質が社会問題となっていたため、モスクワの大学では、近赤外線を用いた世界で初めてのミルクのスペクトル解析をし、乳牛の病気診断の研究をしました。

米谷：その後、学位を取って、しばらくはブルガリアの大学で助教授として教えていらしたのですね。

ツェンコヴァ：はい。

米谷：日本に來られたきっかけは、なんですか。

ツェンコヴァ：東ヨーロッパ社会が劇的に変化し、多くの人たちが英語を使うようになってきました。私は早々と准教授になり多くの講義を任されており、より一層英語の勉強が必要となったため、イギリスやアメリカへの留学を希望しませんがありませんでした。しかし、その時に奨学金による1年半の日本留学を紹介され、チャレンジしました。その結果、最初は私一人で北海道大学に留学し、しばらくしてから家族も日本にやってきました。

米谷：その時から、日本語を勉強したのですか。

ツェンコヴァ：そうです。英語も日本語も勉強しました。日本語については半年間北大のインテンシブコースで学びました。当時の日本語の先生方は本当に素晴らしい方でしたが、日本語の勉強は大変苦しく、あの時には二度と戻りたくないです。その後、1年間は帯広畜産大学で研究しました。そのまま北大農学部で4年間研究員として残り、近赤外線をつかった非破壊分析でバイオモニタリングの研究をし、北大で2つ目の学位を取りました。更に1996年には、神戸大学で准教授となりましたが、日本語による様々な事務書類の作成や日本語で講義をするのに大変な苦勞をしました。

米谷：教員としての先生のキャリアをまとめると、どうなりますか。

ツェンコヴァ：ブルガリアの大学で教員になったのは22歳、23歳から助教、34歳で准教授になりました。日本では、神戸大学の教員となってから講義をするようになりました。

米谷：つまり、ブルガリアで12年間講義を持ち、学生指導をされていたのですね。

ツェンコヴァ：そうです。

米谷：大変興味深いですね。ところで、ブルガリアの大学と神戸大学では教育方法に違いがありますか。

ツェンコヴァ：幾つか違いがあります。一つには、日本の大学と違って、ブルガリアの大学では、非常に人気のある先生の講義には、所属学部に関係なく、すべての生徒が講義を受けることができました。もちろん必修科目はありますが、人気の原因を考えると、毎回の講義の中に一つのストーリーがあり、非常に理解しやすかったように思います。

米谷：日本の大学にはFDというのがありますが、ブルガリアの大学教員は、大学での教え方、講義の仕方については、トレーニングを受けられますか。

ツェンコヴァ：そういった仕組みは特にないと思います。

米谷：ブルガリア時代に感銘を受け、自分もやってみたいと思った講義方法、真似してみたい先生について、教えてください。

ツェンコヴァ：私は、自分の専門分野が広く他の分野とつながっていたり、どのようなコネクションがあるのかが見えて、納得できる講義が好きです。だから自分もそういう講義をするために頑張っています。

米谷：多くの大学教員も、講義を始めた頃には、自分が学生時代に感銘を受けた講義がモデルをベースにスタートするような気がしますね。

ツェンコヴァ：高校まではユニフォーム的で、一方通行な同じ教え方になりますが、大学では、多彩な分野の先生がいて、いろいろな考え方、やり方を持っています。まるで人生そのもののようで面白いですね。

米谷：先生はディクテーションについて、どのようにお考えですか。

ツェンコヴァ：場合によりますね。ただ、ディクテーションは、時間ももったいないので、私の場合は、自分でセレクトティブに聞いていました。そして、試験のために自分のノートを作り、更にその先生の本があれば読んでおきました。

米谷：今、大学ではかなり学生を授業の中でいろんなアクティビティーに参加させています。例えばディスカッションや学生自らのプレゼンテーションです。昔の大学のスタイルでは、先生がずっと説明されていますね。

ツェンコヴァ：そうですね。ただ、レクチャーのスタイルも大変大事だと思います。先ほど話したように、人気のある先生は知識や哲学などいろいろなものをつなぎながら、素晴らしい講義をしていました。余談になりますが、ブルガリアでは、高校生と大学生が同じプロジェクトで研究をし、賞をもらえたら、高校生は大学に試験なしで入れる制度がありました。そして、毎年、そのプログラムの展示会を開催し、新しい技術を紹介していました。

米谷：おもしろいですね。理工系の人材を育成しようという国の政策だったのですね。留学についてお尋ねしますが、先生は、ブルガリアでロシア語を勉強してから、モスクワ大学にいかれましたか。

ツェンコヴァ：そうです。でも、ロシアに行ったら全然通用しなくて、研究をやりながら覚えました。言葉って本当に難しいです。でも研究が好きだから、頑張りました。

米谷：それは大事だと思います。多分研究が好きで、何かを知りたいということがなければ、そんなに語学は上達しないですね。

ツェンコヴァ：よくわかります。学生には、一人で外国に行きなさいと言っています。一人で生き残るためには英語を話すしかありませんから。また留学生は日本語を覚えたほうが良いと思いますね。

米谷：日本で暮らすなら英語だけでなく日本語も覚えた方がよいと思いますが、いかがでしょうか。

ツェンコヴァ：そうですね。英語である程度勉強や研究はできますが、日本語を勉強することによって、日本人に対する関係性が全然変わると思います。

日本の社会の仕組みがわかれば、大変勉強になります。日本社会で自分が本当に

役に立つことができるためには、日本語を覚える必要があります。コミュニケーションができなかったら、とてももったいないです。

米谷：それは日本に来る留学生に対するメッセージにもなりますね。さて、先生は神戸大にいられてからずっと、日本語で授業をされていたのですか。

ツェンコヴァ：そうです。とても大変でしたが、いろいろな工夫をしてきました。

米谷：例えばどんな工夫をされましたか。

ツェンコヴァ：実は、最初は英語でも講義をしました。でも流体力学を英語だけで教えたら、学生がどこまで理解できているのか全くわかりません。ましてや、私の前で居眠りする学生もいて、とてもいやな気持ちになりました。そこで、いろいろ考えました。大切なことは、言語より中身ですね。だから、ワークショップ形式で学生と一緒に講義づくりをやりはじめたことで、徐々に解決していきました。具体的な方法は、学生によるいくつかのグループを作り、私がアメリカの大学の教科書資料を配ります。その資料をそれぞれのグループが分担し、日本語に訳しますが、同時に大切な単語のディクショナリーも作ります。これはとても手間がかかりますが、英語の勉強にもなり好評です。更に他の資料などを調査して情報を加え、ディスカッションを深めていきます。私は、各グループの進行状況や理解度を確認しながら、丁寧に指導します。最後に、それぞれがプレゼンテーションをし、学生全員が、テキストを理解していきます。このやり方は、結果的に、学生のプレゼンテーション力を上達させるだけではなく、私の勉強にもなっています。

米谷：なるほど、グッドアイデアですね。学生が日本語だけではなくて英語で内容を理解し、問題解決する実践的な教育方法だと思います。先生のワークショップ形式の授業は、必然的なアクティブラーニングの一つの形態ですね。問題を解決するために試行錯誤した後にとりついた授業法ですね。

ツェンコヴァ：彼らが課題を見つけ、インターネットや他のソースを活用するためには、日本語だけではなく、英語が必要なのです。2016年11月に開催したアクアフォトミクス国際シンポジウムでは、学生たちが準備から関わって、大変貴重な体験をしました。その中で、英語によるコミュニケーションの必要性を実感したことも大変貴重です。

米谷：ツェンコヴァ先生は理想的な国際的な研究室運営ができていると思います。最後になりますが、女性の研究者や若手の研究者に、メッセージをいくつかいただけますか。

ツェンコヴァ：多分女性研究者の教育で大事なことは、自分の姿を見せることで教育していること



モンタニエ氏（ノーベル生理学・医学賞受賞者）のセミナーにて

だと思えます。

米谷：後ろ姿又は、背中教えるということですね。

ツェンコヴァ：私の知り合いに、3歳と5歳の息子さんを持つブルガリアの若い医学の女性研究者がいて、彼女は大変な苦勞をして本を3冊出しました。その姿を3歳の息子が見て、ママのような研究者になりたいと思ったそうです。それも教育ですね。

米谷：次に職場の環境についてお尋ねしますが、女性が安心して自分の研究や教育に打ち込むための要素は、夫の協力の他にどのようなものが大事だと思いますか。

ツェンコヴァ：まずは、自分の意思が大事ですね。それは、自分にやりたいことがあるというパッションです。懸命にやり続ける姿は、周りの人たちの気持ちを動かし、サポートしてもらえるようになると思います。少なくとも、私は、頑張っている人を助けたいと思っています。簡単なことではないけれども、実際には人生はそうなっているように思っています。

米谷：それはすごいメッセージですね。先生の今までの歩みというのを見ると、まさにそれを物語っていますね。

ツェンコヴァ：私自身は、頑張っている人に対しては全力で助けようと思っています。私自身もここまで来られたのは本当にたくさんの人に助けられたからです。

米谷：やはりそれは大事ですね。最後に、先生が授業のやり方などについて、他の先生に相談したことはありますか。

ツェンコヴァ：あります。私は、授業のやり方だけではなく、わからないことがある時は、すぐに誰かに尋ねました。その結果、多くの先輩の先生たちや事務職員の人たちに助けられました。本当に感謝しています。

米谷：それでは、授業などについて気軽に話し合える環境は必要だとは思われますか。

ツェンコヴァ：必要だと思います。他の先生のアドバイスやエンカレッジも大切です。私もいろいろな人とつながりながら話をし、そこから悩んでいたことの解決策を見出すことも多いです。私は、研究も含めて、チームワークでやっていくことがとても好きです。教育方法についても、多くの人が話し合いながら、より良い方法を見つけていくのがよいですね。なんだか現代社会は、一人一人が孤立しているようでよくないと思っています。

米谷：“Heaven helps those help themselves.” 日本語では「天は自ら助くる者を助く」と言うことが大切ですね。

ツェンコヴァ：そうです。そして、一人でできるとは思わずに、自分のやりたいことをはっきり見せることもとても大事だと思います。

米谷：それがビジョンですね。伝えられる人たちも、先生のいい影響を受け、インスパイアされると思います。先生、すごくいろいろお話を聞かせていただいてありがとうございました。

(インタビュー日：平成28年12月15日)

文理融合と多言語間のコミュニケーションを求めて彷徨う

林 良子先生（神戸大学大学院国際文化学研究科教授）

出身：東京都 東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業、同大学大学院地域文化研究科修士課程修了（修士（言語学））。東京大学大学院医学系研究科第一基礎科学専攻博士課程入学後、1995-1998年にドイツ学術交流会（DAAD）奨学金を得て、ミュンヘン大学、キール大学に留学。東京大学大学院医学系研究科修了（博士（医学））。国立障害者リハビリテーションセンター研究所リサーチレジデント、北海道医療大学専任講師を経て、平成16年4月本学国際文化学部准教授として着任、平成24年4月より国際文化学研究科教授。



米谷淳（以下、米谷）：神戸大でも文理融合的な人材育成に取り組んでいますが、林先生はまさに文理融合をされています。先生は、文系で、もともとはドイツ語を教えておられますが、東京外国語大学の修士まで出た後、東大大学院で音声の研究で医学博士を取られています。最初から音声学をやっておられたのですか。

林良子（以下、林）：東京外大でドイツ語の修士課程を終えた当時、東京外大には博士後期課程がありませんでした。ドイツ語や英語の発音は一体どうやったらうまくなるんだろうという単純な疑問から、当時、言語学の基礎的な分野のひとつとして位置づけられていた音声学という分野に興味を持ちましたが、その当時は、大きな機械をつかって、出力された専用の用紙にでてきた音声波形を、定規で計って音声の分析をやっていたという状況のころでした。もっと自由に音声进行分析したり、合成したりということができれば、言語の研究ももっと進むのになあと思っていました。この音声学の分野で、当時世界的にも最先端であった東京大学の医学部にある「音声研」と言われる音声言語医学研究施設というところで、医学博士課程があり、文系の学生でも出願が可能ということで、こちらを受験してみようと思ったのです。そこでは、主に言語病理学の研究がなされており、耳鼻科や神経内科、言語聴覚療法の分野の方々が集まる研究室でした。私はもともといつかはドイツへ行ってみたいと思っていたため、東大の博士課程に在籍中にドイツ政府の奨学金を受け、ドイツに留学しました。ドイツでは、当時の音声学はすでに完全に文理融合しており、工学や心理学と関連させて研究されていました。

米谷：先生が医学、生理学の分野に入っていくのは、もともと素地がありましたか。

林：いいえ、全くありませんでしたが、東大の医学部で理系、特に医療系、工学系の先生方、学生さんたちと大いに交流したことから、領域を超えて共同研究する楽しさというものを学んだと思っています。

米谷：文系の研究者が理系の最先端の分野に行き、必要な勉強をしながら、自身の研究をする理想的な形ですね。専門家ってというのは、一つの分野に興味を持って、それだけしかやろうとしない傾向がありますよね。

林：私の時代も、必要なものだけをやりなさいという教育だったと思いますが、特にド

イツに行って変わりましたね。もちろん、東大医学部に進んだこともあります、ドイツは主専攻と副専攻を二つ選択するため、主専攻は音声学、副専攻は言語学や日本学といったように自由に組み合わせることができました。中には、情報学や心理学を副専攻にとる学生もいて、様々な分野に目を向けやすくなっているなど思いました。

米谷： そうですね。大学の教育システム自体が、異分野の人を受け入れる形になっているのですね。数学を専門に勉強していないので、受け入れられないといったような門前払いはないのですね。

林： ドイツやヨーロッパ諸国では、そもそも大学入学試験がないので、それはありません。学部によっては定員が設けられており、試験や書類選抜があったりもしますが。現在は、日本でも言語障害学が多くの大学で学部や学科として新設され、入試では文系と理系の両方で受験できることが多いようです。

米谷： 実は、そのように必要に応じて、文理融合した研究をすることが、文理融合のかけ橋になっていくのだと思います。

林： そうですね。ただ、音声学というのはもともと学際的なので、言語学の一部とも、心理学の一部とも、教育工学の一部とも言えます。したがって隣接分野のことを勉強せざるを得ない状況でした。ドイツから帰国し、ただの言語研究だけではなく、医学部博士論文としてふさわしいものにするようにと指導教員に言われ、当時ブームになりつつあった脳の研究に興味を持ちました。2000年ごろの話です。ドイツ語と日本語の音声を比較しただけでは人文学科系での論文と同じになってしまうので、結局、日本語の音声を聞き取っているときに、脳がどう活動しているかという方向で研究をやり直し、それを論文として提出しました。

米谷： 文理融合を教育だけでしようとするのは、無理がありますね。研究と結びついた文理融合教育では、必然的に必要なものだけを相手に教え、お互いが協力・補完してやっていくのですね。

林先生は、いつから大学の教員を目指されましたか。

林： 博士課程にいたころです。しかし、ドイツから帰国してみると、現実には非常勤先も全くなくて、非常に苦勞しました。たまたまドイツにいるときに、ミュンヘン大学日本センターで日本語を教えていたことから、日本語教育に興味を持ち、帰国してすぐに日本語教育能力試験という、日本語教員の資格となるような試験を受験しました。また、國學院大學に新しく短期留学生受け入れコースができるので、日本語を教える人を探しているという話を聞きつけ、自分で売り込みに行ったところ非常勤講師として雇ってもらえることになりました。大学での非常勤の口を探すというのは、最初のうち、とても難しいことだと思っています。その後、学振をもらったり、ドイツ語の非常勤をやるようになりましたが、なかなか専任の職がなく、博士論文もなかなか進まず困っているところ、今度は医学部で助手をやってくださっていた先生の紹介で国立障害者リハビリテーションセンターの研究員ポストに空きがあるということで、そこで仕事をしながら、週1回は非常勤先で日本語やドイツ

語を教えたり、夜また研究所にもどったりして、何とか、学位論文を書き上げました。さらにこの研究所での仕事がきっかけで、今度は北海道医療大学に言語聴覚士の学部が新設されるというときに、外国語科目のコーディネーターの募集があり、応募して、ようやく専任の職を得ることができました。ですので、神戸大学に来る前までは英語の教員として勤務していたんです。新設された心理科学部の中の言語聴覚士科での外国語教育の仕事です。学科自体の立ち上げにも加わりました。そして神戸大学です。当時、CRESTという大きなプロジェクトが国際文化学部を中心に走っていたおかげで、「全学のドイツ語教育を担当でき、音声研究の実績がある者」という不思議な公募が出て、これは私しか日本にいないだろうと思って応募してみたら、すんなり採用してもらえました。ですから、なんだかひよんなことから次から次にキャリアが決まってきた感じです。

米谷：北海道医療大学と言えば、FD（ファカルティ・デベロップメント）で有名な北大名誉教授の阿部和厚先生がいらっしゃる場所ですね。私は神戸大学大学教育研究センター研究部にいた頃、北大が日本で最初にやったFD合宿に参加しました。林先生もFD合宿に参加しましたか。

林：やりました。泊りがけで職員や教員の方々と、様々なプレゼンの方法やグループディスカッション、大学としてのビジョンの制定など、学長や理事の方々までも一緒に議論を行ったりしたのは、すごく印象的でした。

米谷：私も、北大で当時最先端だったアクティブラーニングを阿部先生に学んで、神戸大でグループワーク中心の授業をしたところ、北大のように演劇型プレゼンをするグループも出てきました。

林：そうですね。私はそんな経験を1年生前期の基礎ゼミでよく用いて、グループディスカッションやプレゼンに応用したりしています。今では、どっちかというともはや普通の授業形態になっていますね。外国語の教育方法というのも、日進月歩で様々な教育方法が提案されていて、常に色々取り入れる努力をしています。E-learningだけではなく、反転授業、演劇を取り入れた活動など、もっと余裕があればぜひ取り入れてみたいと思っています。北海道医療大学では、FDのことだけではなく、OSCI（オスキー：医学教育において行われる技能・態度を客観的に評価する臨床能力）を用いた医療コミュニケーションの研究や、言語聴覚士のコアカリキュラム作成などにもかかりました。なんだかんだと大学教員としての基礎教育をしてもらったなあと思っています。それとともに、コミュニケーション研究というのが分野横断的であるということも身をもって理解できたと思います。

米谷：教職免許はもともとお持ちだったんですか。

林：中・高校の英語と、ドイツ語の中・高校と、4つの教員免許を大学の学部修了時に取りました。先ほどちょっと言ったように、ドイツやその後の帰国後には日本語教育もやりました。現在神戸大学では、全学のドイツ語を教えながら、学部では英語と日本語の比較の話、大学院では留学生が多いので、日本語教育に関する授業と、自分がかかわってきた言語が教育にも役に立っています。ドイツにいたころ、イタ

リア語も習得したので、国際文化学部ではイタリア語の授業も開講していました。今年、来年度もイタリアのベネチアとナポリで海外研修を行ないます。イタリアでの研修は人気があるようで、一昨年のナポリ研修には15人、今回のベネチアには14人の学生が参加しています。もともとの自分の専門はドイツ語だったのですが、ドイツ語やドイツの文化だけにとらわれることなく、EUや、例えば一昨年前には国際交流委員長としてブラジルの大学をいくつか訪問し、新たな学術協定などの締結に尽力しましたが、こういった、さらに広い視野を持てるようになったのは、外国語学習のおかげだと思っています。学生たちにもぜひ英語以外に一つ、できれば二つの外国語を身につけるように言っています。イタリア語の授業にたまにドイツ人やスペイン人、中国人の留学生が履修しにきたりすることもありましたが、それもなかなか楽しいものです。学部の演習では、インターネットを用いて、フランスやイタリアの日本語を学ぶ学生さんたちと共同で一つの課題を行なうといった遠隔共同授業も展開しています。英語でも日本語でもよいのですが、近年は、ますます相手の文化背景にまで思いやりながら、とにかくコミュニケーションできる能力が求められていると思います。大学にも外国人留学生がこれだけ多くなってきているのですから、普段から国際交流について意識していきたいですね。国際文化学研究所、というか言語文化系の分野には、特に留学生が多いです。例えば私の研究室は、大学院生は5名が中国人で、日本人は1人です。大学院では、去年、博士前期課程で日本語音声学の講義を行ないましたが、出席者は30人で、中国人が28人、韓国人1人、日本人1人といった具合でした。ただ、学部の教育や卒論研究と、大学院でのそれが別々になってしまい、うまく連携できないのは、一つの問題点になっています。

米谷：留学生は、無理と思えるような研究を強く希望するので、指導が難しいのですが、林先生はどうですか。

林：そういうことは多いですね。学部での基礎的な知識が欠けていきなり二年で修士論文を書かなければならないのですから。ただ、自分を振り返ってみると、やはりドイツに留学した当時は、専門分野の言語学とか、音声学の基礎的なことの知識が圧倒的に不足していたと思います。日本で専門分野の勉強というのは、せいぜい学部の3、4年生の2年間だけです。1年目から専門分野を徹底的に勉強してきた学生たちと張り合うのは難しく感じました。ドイツ語はうまくしゃべれるけど、中身が希薄で本当に困ってしまい、あわてて基礎的なところからドイツ語で



・スカイプを用いたドイツ語学習について発表

勉強しなおさなければなりません。神戸大学に入学を希望する学生も、外国の大学の日本語学科で4年間日本語を専門に学んできている学生が多いので、日本語は良く理解できるけれど、言語学や心理学などの専門分野の知識があまりない学生がいます。ただ、それは実は日本の学生にも当てはまるので、大学院でも基礎的なところから積み重ねるような授業をやらざるを得ない状況です。色々困ったことも起こらないわけではありませんが、自分の辛かった留学時代を思い出し、なるべく学生の立場や気持ちを想像しながら指導していくよう、心掛けています。

米谷：若い教員、大学院を目指す学生に向けてメッセージをいただけますか。先生の生き方そのものがメッセージのような気がします。

林：私の辿って来た道のりは、あまり模範的ではないので、アドバイスになりえるかわかりませんが、とにかく様々な人たちと話すことが大事だと思います。大学院生にも、学会に参加したら必ず座長に挨拶し、自分の発表に質問してくれた方には後で話しかけにいき、懇親会に出て一人でも多くの人と会話してくるようになっていきます。話す内容は、学術的なことばかりではなく、実は雑談、世間話、よもやま話、なんでもよいのです。そんな中から、色々なチャンスが巡ってくることが多いし、実際そうでした。研究のヒントもそこから生まれることが多いです。ピアレビューなどが学内でもありますが、他の人の授業を見るのものすごく勉強になるので、積極的に参加するとよいと思います。ただ、最近の若い教員は、他の教員と、忙しくて話す余裕が全然ないようです。教員が集まれるスペースもありません。私は、国際文化科学研究科に着任していただいた15年になりますが、思い返してよかったことは、特に着任したてのころ、周りの教員の方々や院生さんたちと毎日のように食事に行ったり、研究室で集まってとりとめのないことを話したりと、頻繁に交流ができたことです。特に金曜日の夜には、六甲道のあたりでよくいろいろな先生方と顔を合わせるがありました。今は、自分は子育てもあり、すっかり足が遠のいてしまっているのですが。ラーニングコモンズが鶴甲第一キャンパスにできましたが、教員もどこか集まって雑談できるようなスペースがあればよいなと思います。

米谷：悩みがあれば、気兼ねなく相談できる環境があればよいですね。

林：そうですね。ただ、気になっているのは、最近は、みんなメールに頼っていて、目の前にいる人にもメールで伝えたり、メッセージを送信したりしてコミュニケーションをとっていることが多くあります。演習では、とにかく学生



ナポリ研修で遺跡発掘現場を訪れる

に隣にいる人としゃべりなさいと言います。ヨーロッパとの遠隔授業でも必ずメールやチャットではなく、直に話すようにと。直に表情を見て、声を聞いて、コミュニケーションすることはすごく大切だと思うので、時間ももったいないと思わずに、教員の方々にもいろんな人としゃべることをお勧めします。

米谷：ところで、留学生に教えるときに気をつけていることや、何か感じることはありますか。

林：留学生のほうが日本人の学生よりずっとよくできると思うことも多いです。ガッツもあります。でも、例えば、日本で自分の専門分野だけを学ぶのではなく、日本の文化をなるべく見てほしいと思います。私は全学でドイツ語を担当していますが、ドイツ語を教えるだけではなく、ドイツで今何が起きているか、なぜドイツ語を勉強しなければいけないのかを必ず話します。一つの言語を勉強するには、背景となる地誌学的知識（ランデeskunde）や文化が大変重要だと考えて授業をやっています。だから、海外から日本に来る留学生も単に自分の就職に生かす勉強だけではなく、日本はどういう国で、どういう歴史を持っているのか、どんな文学があるのかなど、なるべく多くのことを知って楽しんでほしいとも思っています。

米谷：日本人の学生に対しては、何か意識して指導していることはありますか。

林：絶対に留学することを勧めています。経済的事情や、いろんな壁があって難しいという学生が多いですが、多彩な留学のシステムがあるので、短期でもいいからとにかく海外に出なければだめだと思っています。ただできれば、なるべく長期、海外に行ってほしい。それを目標の一つとして、語学や専門分野の勉強をより深く勉強してほしい。また、外に目を向けるだけではなく、キャンパスにたくさんいる留学生、特に中国からの留学生の中には英語が得意な人もすごく増えていて、更に日本語もこれだけできるわけですから、こういった現実を見つめ、日本の学生はすぐ近くにこういう人たちがいることをしっかり意識して欲しいと思います。

米谷：文理融合や国際交流に関するお話は、大変重要で、興味深いお話でした。どうもありがとうございました。

（インタビュー日：平成29年1月10日）

🌈 出会いに導かれて 🌈

日浦 直美先生（関西学院大学教育学部教授）

1976年関西学院大学文学部英文学科卒業、1984年聖和大学大学院教育学研究科修士課程修了、聖和大学附属北聖和幼稚園教諭1985年聖和大学助手、1988年聖和大学専任講師1990年ロンドン大学教育研究所留学、1993年聖和大学助教授、2001年聖和大学教授2007年阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、2005年OMEP(世界幼児教育機構)日本委員会 副会長（至現在）、2007年日本乳幼児教育学会第5回学術賞受賞、2009年より現職、2010日本保育学会第46回保育学文献賞受賞



米谷 淳（以下、米谷）：まず、簡単に先生のご経歴からうかがいたと思います。

日浦直美（以下、日浦）：関西学院大学の英文科に入学し、卒業後、企業で秘書的な仕事をしました。ところが、私のついた秘書の仕事が続けることは、自分の描いていた人生と違ってと感じたんです。当時の私は、女性ならではの仕事で、かつキャリアを積み重ねるほど、それを尊重される仕事に就きたいと思っていました。その後 外国の航空会社入社のための就職活動、阪大病院第一外科学教室での教授秘書、故郷で児童英語学校の講師と、いろいろな仕事をしながら、自分の生き方に合った仕事を探していました。

米谷：なるほど。

日浦：このような状況の中で、おぼろげですが、私の頭の片隅には、幼い頃に出会った妹の幼稚園の園長先生のスーツ姿が残っていたのではないかと思います。といいますが、私にとって、女性がスーツを着ている姿を見たのは、この時が初めてなのですが、女性がスーツを着て責任ある対応している姿への憧れの気持ちが、私の心の中に働く女性の原風景として残っているように思います。

米谷：それは、すばらしいですね。

日浦：この思い出は、年齢を重ねるに伴って、より尊敬されていくような仕事、つまりキャリアを積むことに意味があるという、私の持つ「仕事」のイメージにつながっているのかもしれませんが。

このことに加えて、もう一つ、将来を考える際の印象的な出来事がありました。私は、自分の望むような仕事に出会うことがなく、一旦故郷に戻り、知り合いの紹介で小学1年生の男児に家庭教師として勉強を教えていました。ある日、私は、行軍用の真っ白なスーツを着替えずに、そのまま、勉強を教えに行ったことがありました。しばらく勉強をみていたのですが、その男児に、突然、スーツの背中に赤いボールペンで思いきり落書きをされたことがあったんです。

米谷：おもしろい。それはすごい経験ですね。

日浦：はい。私は、すぐに行動に起こすところがあって、その子どもの行動が理解できない私は、子どものことが心配になり、帰り道にすぐに児童相談所を訪ね、そのこ

とについて相談をしました。そのときに対応してくださった方が非常に印象的なことをおっしゃいました。多分、意図的だったと思いますが、「そういう子どもは、落ちるところまで落ちたらいいので、あなたに関わる必要はない」と言われたのです。私にはとてもショッキングな発言でした。そのことがきっかけになり、若い私は、その言葉に憤りを感じ、子どものこと、特に幼い子どもの教育について学びたいと思うようになりました。

米谷：先生の心に火がついたわけですね。

日浦：はい。今なら、その時のスーツへのらくがきは、子どもの心の叫びだったことがわかります。この一連の出来事に、今ではとても感謝しています。その後、聖和大学大学院に籍を置いて日本の幼児教育を学び、教員免許を取得しました。大学院を終了後は、幼児教育の現場で働きたいと願っていました。指導教授から大学の附属幼稚園を紹介していただき、ご縁があって、その幼稚園で、幼稚園教諭として働きましたが、研究を続けるように進められ、大学の教員になりました。そして、ロンドン大学教育研究所への留学を経て、大阪大学で学位を取得しました。

現在、日本乳幼児教育学会の会長、常任理事、日本保育学会の評議員、ユネスコの下部機関である世界幼児教育・保育機構日本委員会理事等の役割を担っています。経済・社会の変化に伴い、子どもをめぐる環境は大きく変化し、子どもやその保護者の多様性を尊重することのできる、質の高い専門性を持った保育者の養成が本当に必要だと感じています。

米谷：本当に必要ですよ。

日浦：保護者について、量に関して大変なニーズがあります。大変なニーズがあります。世界的にもOECDが保育者の専門性および保育の質の向上を提言しています。

米谷：学生時代は、どういう授業が心に残っていますか。

日浦：私の大学時代を思い出してみると、膨大な知識を紹介されたこともさることながら、授業の端々に先生が見せる人生観とか、教育理念を交えて話されたことは、すごく記憶に残っていますね。だから私も、学期の最初の授業で、自己紹介も含め、私の経験や生き方のポリシー、人間観みたいなことを学生に伝えています。そして、授業の途中で教室を出入りするときには、会釈してくださいねとも伝えています。なぜなら、大教室であっても、私はテレビの中の人のように勝手に話しているわけではない、「あなた」に話しているのですからと。学生は実行してくれています。その他には、いわゆるアクティブ・ラーニングのようなことかも知れませんが、一緒に学ぶ仲間とか、インタビューした人などとのやり取りを通して、教師以外からも学ぶような授業は、若者の心に残るのではないかなというように。

米谷：教員のポリシーをきちんと伝えるということですね。

日浦：そうですね。だから、最初の自己紹介が、大きく作用をしているように思います。私は、ずっと考えてきた「死」について語ります。若い時に大切な友人を失った体験、震災に遭いながらも、なぜ自分は生かされたのかということなど、自分の生きることに関する深い経験を交えながら、今という時間はもう二度とやってこない

いう話をします。
更に、人の一生は蠟燭のようで、その太さも長さも自分では知ることはできないので、今の時間をお互いに大切にしましょうという話をします。私の授業は子



育ててにかかわる授業なので、この話はとても重要だと思っています。なぜなら、私の経験上、大学時代の先生の講義の内容は忘れてしまっても、先生のメッセージや人格は、心に深く残っていますから。

米谷：さて、大学の授業に関して、日浦先生から若い先生方に伝えたいことはありますか。

日浦：私の若い頃は、しゃかりきにはりきっていました。授業では、自分が伝えたいことを全部伝えようとしていました。しかし、ある時、はりきり過ぎると学生との波長が合わないで、逆に、ちょっと肩の力を抜いているというか、あまり張り切っていない時の方が授業がうまくいくことに気がつきました。だから、準備は100とすると、時々保育の現場での感動した体験や子どもから学んだことを交えながら、65か、70ぐらいの授業をやっています。余裕のある姿勢で、教育現場で起こるすばらしい体験を話しながら理論を説くほうが学生には伝えたいことが伝わり、何か共通に感じ合うことができるような手応えを感じています。時々、卒業生が授業中に話した私の言葉を覚えていると言ってくれることがあり、そのことは、私の励みになります。私ならではのメッセージを、講義を通して学生の心に届けるのが私のやりがいかなと思います。

米谷：授業内容と共にもっと大事なものが伝わるわけですね。

日浦：今、私は、やっというんなことがわかってきたように思います。双方向性、学生の発言が多くなるように工夫すると、それが私のものと融合してもっと豊かになるということ、経験的に感じています。また教員としての生活というのは限りがなく、深いものですね。

米谷：他にもありますか。

日浦：私自身のベースとなる発想は、幼稚園の現場に資するような研究がしたい、学んだことを生かしたいということでした。その想いがずっと心に残っているため、今も教員養成に携わっているのです。学生や若い先生達に短期間で仕事をやめるのではなく、それを深めて一生の仕事にしてほしいという願いがあります。

しかし、社会構造的に幼児教育の現場は、キャリア形成を考えず5年ぐらいのサイクルで新しい人を次々と採用していくケースも多くあります。さらに、日本の幼児

教育全体を見たときに、幼稚園だけに焦点当てると、公立よりも私立幼稚園に在籍している子どもの割合のほうが多いのです。したがって、私立幼稚園で働く先生の教育はとても大切なのですが、公立よりも私立幼稚園の先生のほうが短期間で仕事をやめることを当たり前のように受け入れる環境になっており、それは望ましくないと考えています。子どもの成長に一番大切な時期には、幼児教育の専門性を身につけた先生が必要だと思います。

米谷：先生は、キャリアの重要性を感じながらも、まだまだキャリアを重んじない社会に学生を出していくことになる場合、そのギャップを授業でどのように埋められていますか。

日浦：それについては、私は強く意識していて、学生に免許を持つことの意味をきちんと話します。今すぐ先生にならなくても、教育学は、ある意味、未来学であるから、未来は皆さんにかかっている。だから頼みますよという話を頻繁にしています。それに加えて、現職研修の場では、幼児教育の重要性についてもっと声を上げてくださいということも必ず伝えていきます。真面目に勉強や研修をして身につけた皆さんの専門性とその仕事が軽んじられないよう、もっと自分たちで世の中にアピールしていかない限り、このままではだめですと言いつつ続けています。

幼児教育の現場の先生が、小学校の先生とどこが違うか、親とどこが違うかということが世の中に伝わっていない現状を現職の教員や学生に意識して伝えていきます。弁護士や医者のように一生の仕事として考えて欲しいと思っています。

米谷：保育者としての資格や免許証を持った人たちがしかるべき場所を与えられて、仕事をしながら質の高い保育者になっていくという過程がすごく大事なのですね。

日浦：そうです。今は、少しずつ現状が変化し、キャリアのある人が認められるようになり、世界的な動きにおいては、保育者の専門性が重要だとされつつあります。理想的な状況になるには、まだまだちょっと道は遠いですが。

そういうことを考えながら、学生指導をやっているのですが、現在は幼児教育コースの半分ぐらいの学生は、企業に就職します。彼女たちの多くは、将来子育てが一段落したら、免許・資格を利用して働きたいという計画をもっているようです。できれば、卒業後すぐに、教育・保育の現場に出て働き、専門職としてのキャリアを重ねてほしいという願いはありますが、学んだことを活かそうとする個々の将来計画を、尊重したいと思っています。

米谷：自分の成長と社会貢献ですね。マッチングさえうまくできれば、仕事の間はたくさんあるわけですね。

日浦：そうですね。だから現場の先生方、園長に、卒業生が長く勤められるように一緒に育ててくださいとお願いしています。

米谷：そういうシステムがあれば、素晴らしいですね。

日浦：できれば、学生が望めばキャリアを積める道をつくっておきたいと考えています。現在も、園内研修とか、10年研修とかありますので、それをもっと深めるためにキャリア・パスをはっきり見えるような形にできたらと考えています。

それがあると、目標が見えて頑張ることができると思います。

米谷：それを社会的にちゃんと認めていく必要もありますね。

日浦：はい。今ね、保育士に関しては厚生労働省の管轄ですので、看護や介護職などのようにキャリア・パスが明確になりつつありますが、幼稚園教員については、これからのので、私も尽力したいと思っています。退職まで、約5年ありますので頑張りたいなと思っています。

米谷：先生の活動は、素晴らしいですね。最後に少し夢のある話をお伺いしたいのですが。

日浦：いろいろ考えると、SNSやらAIが発達すると、将来なくなる職業があり、反対に、将来も残っていく職業、新たに生まれる職業などが出てくると思います。しかし、コミュニケーションとクリエイティビティとホスピタリティを含んだ職業、すなわち、人間らしい仕事はなくなると言われていますし、私もそう思います。つまり教員という職業はなくなるのではないのでしょうか。

米谷：そうですね。非常に大事な話を聞かせていただきました。

(インタビュー日：平成29年1月24日)

● 教員生活15年を振り返って ●

西村 智先生（関西学院大学経済学部教授）

仏リール第1大学Ph.D.（経済学）。

専門分野は労働経済学。少子化問題（男女交際・結婚・出産行動）や労働問題（女性労働、ワーク・ライフ・バランス）について研究している。

最近の業績に「若者の恋愛離れに関する一考察：恋人探しにみる先送り行動」『人口学研究』No.52がある。



米谷 淳（以下、米谷）：西村先生は関西学院大学の御出身ですね。

西村 智（以下、西村）：学部、大学院とも関学出身です。博士課程3年のときに、現在、本学と学部間ダブルディグリーの提携を結んでいるフランス、リール第一大学に2年半留学しました。

米谷：そこで学位をとられたのですか。

西村：そうです。少子化問題をテーマにして経済学の学位を取得しました。

米谷：それは、世界的な少子化の流れがあったからですね。

西村：日本では、1989年に出生率が過去最低の数値を記録し（1.57ショック）、90年代から少子化が社会問題として認識されるようになりました。その当時日本では女性の就業率が上がると出生率が低下するという見方があったのですが、フランスを見ると、女性の就業率が高く出生率も比較的高い。そこで、日仏比較研究をしようと思いました。

米谷：フランスは少子化ではないですね。

西村：フランスでも90年代前半に出生率が1.66まで下がりましたが、その後、出生率を2.0まで回復させています。その背景に、お金がなくても子供が育てられるよう手厚い現金・現物給付が行われていること、子育てにより男女のキャリアの差が開かないよう政策が行われていることがあげられます。

米谷：先生は、フランスで研究され、関学に戻ってこられて学位をとり、ここで教育職に就かれたのですか。

西村：1年間のブランクはありましたけれども、運よく母校に採用していただきました。

米谷：女性の社会進出を支援するような活動はされていますか。

西村：はい。自治体の男女共同参画審議会の委員を務めたり、民間企業に勤める女性の方々と調査やシンポジウム等で女性のキャリアについて議論したりしています。

米谷：例えばどんな提言をされていますか。差し支えなければ、お話しください。

西村：2年前にスウェーデン、フィンランドとフランスの企業と公的機関を調査して、女性活躍に関する提言を行いました。具体的には「性別にかかわらず優秀な人材を活用すること」、「タレントを資本化すること（上司による部下のキャリアデザイン）」、「女性へのエンパワーメント（女性の背中を押す）」です。

北欧やフランスでは女性が活躍しているイメージがありますが、意外なことに、いずれの訪問先でも女性が男性に比べて遠慮しがちだと伺いました。例えば、新しいポストの公募に男性は躊躇なく手を挙げるけれども、女性は躊躇してしまう人が多い。だから、女性には背中を押してあげることが大事なのだそうです。



夏合宿の白浜にて

また、誰が背中を押すのかについては上司の役割が大きいということもわかりました。

米谷：教育や家庭の中でも、そういう価値観とか、そういう態度を上手に醸成してあげるのが、親や教師の役割ですね。

西村：私のゼミでも女子学生は能力が高いにもかかわらず遠慮をする傾向にありますので、時にはさりげなく背中を押すようにしています。

米谷：でも、関学の女子学生は前向きな人が多いイメージですが。

西村：前向きだとは思いますが遠慮している部分も多いと思います。経済学部は女子が3割弱しかいないという数の問題もあるのか、何か後ろに一歩か二歩下がっている感じがしています。おもしろいことに、非常勤で某女子大に行ったのですが、積極的に意見をいう女性が少なからずいました。女性しかいない環境では女性は自信を持てるのかもしれませんが。

実は、私が女性労働に興味を抱いたきっかけの1つに、私自身が女子高出身だということがあります。女子高では、当然ながら生徒会長も応援団長も女性です。彼女達にはリーダーシップ力があります。学校と交渉して校則まで変えた学年もあったようです。高校時代にそういうしっかりとした女性達を見てきたわけですが、その後、大学に入ると男性の後ろで遠慮している女性達がありました。このギャップにすごく違和感を覚えました。この経験が男女の違いや女性のキャリアへの関心につながったと思います。

米谷：そうですね。先生のゼミの男女比はどのぐらいですか。

西村：学年によってばらばらなのです。男女比が7対3だったり、5対5だったり。時には9対1のときもあります。

米谷：学生の研究テーマは、どのようなものですか。

西村：貧困、教育、少子化をテーマに選ぶ学生が多いです。

米谷：女子学生の割合が低いのはどうしてでしょうか。

西村：母数が少ないことが大きいと思います。それから、ゼミの面接をする際に男女比を一切気にしません。単に意欲ある人を選んだ結果、いろいろな比率になったとい

うことです。

米谷：西村先生のゼミ生はどのような雰囲気ですか。印象的なことはありますか。

西村：ゼミ生は、比較的穏やかで協調性に富んでいる学生が多いです。真面目で意欲もありますが、少々押しが弱いところがあります。それでは、就活で不利になるので、ゼミ生には上品に人を押しのけるよう教えています（笑）。

米谷：具体的にはどんな指導をしますか。

西村：できるだけ小さなグループをたくさんつくり、まずそこでのリーダーになるように仕向けます。

米谷：役割を与えるわけですね。個別指導はどのようにされていますか。

西村：ゼミは、週1回しかないので、もちろん個別指導も必要です。現在、ゼミを担当して8年目になりますが、最初の頃はゼミ運営に苦労しました。今もお修行中ですが、少しは慣れてきたように思います。ひとつ先輩先生に教えて頂いたよい方法があります。それは、学生が発表する前日に、15分でもいいので打ち合わせをすることです。良い発表は、準備や段取りが命です。場合によっては1時間になることもあります。プレゼン内容の確認から時間配分等の段取りまで一対一で相談にのります。そうすると、飛躍的にプレゼンテーションの質が上がります。また、一対一で指導すると、学生の名前を覚えるだけでなく、お互いを知り距離が縮まります。時間はかかりますが、効果的な方法だと思っています。

米谷：手間暇惜しまずですね。

西村：でも、余り手間暇をかけ過ぎると自分の研究に支障が出るので、バランスが大切だと思います。若いときは、そのバランスが滅茶苦茶だったと思います。失敗を繰り返し、改良を重ねて、やっと今、ちょっとだけ落ちついてできるようになったという感じです。

米谷：講義は、どうですか。

西村：家計経済学という講義を担当しています。学生数は多い時で大体300名くらいです。

米谷：それでは、頑張っている若手教員に、西村先生から何かメッセージをいただけますか。

西村：想像力が大事だと思います。最初は、学生と年が近かったにも関わらず想像力が欠けていたように思います。1年目に失敗したのは、自主性を養わなければと考えて、あまりあれこれと口出しをしなかったことです。その結果、学生達のゼミ活動は不活発なものに終わりました。今は、自分が二十歳の時どうだったかを常に考えるようにしています。二十歳で丸投げにされても何もできない、じゃあどうしたら学生達は動けるのか、と考えます。その結果、常に私から三つほどの選択肢を提示します。すべて与えるのではなく、限られた中から選ばせる。そのやり方ですと学生も達成感を感じられるようです。難しいですが、どこまで手を出し、どこから見守るかという見極めが大切です。もちろん今だに失敗することもあります。うまくいったときは学生達のモチベーションが上がり、挑戦してよかったと言ってくれます。その時は、本当に嬉しく思います。

米谷：成功体験みたいなのを残してあげるわけですね。

西村：そうです。私自身もそれほど優秀な学生ではなかったのですが、自分が二十歳のときにどうだったかを常に思い出して、指導するように心がけています。

米谷：ゼミ生は何人くらいですか。

西村：1学年20人です。経済学部は2回生からゼミが始まりますので、三学年で60人です。

米谷：最近の研究はありますか。

西村：直近では、女性の昇進意欲について研究を行いました。分析の結果、女性の意欲にリーダーの経験の有無が関係していることがわかりました。リーダーの経験をすることで、入社時に昇進に関心がなかった人が関心を持つ一方で、リーダーの経験をしないことで昇進意欲がなくなってしまう。

米谷：若い人にもどんどんリーダーの経験をさせる、それが将来につながるわけですね。先生の原動力は何ですか。

西村：クリエイティブなことが好きなことでしょうか。教員の仕事は、研究はもとより授業もクリエイティブな要素が多いと思います。

米谷：誰かにサポートしてもらいましたか。

西村：わからないことは先輩に教えを乞うてきました。

米谷：女性教員も含めて。

西村：経済学部には先輩の女性教員がいませんので、話しやすい男性教員に相談してきました。

米谷：先生の後輩で、西村先生のように教員になられた方はいらっしゃいますか。

西村：同級生は他大学で教員になっています。

米谷：これからも西村先生のような教員が育つと良いですね。



普段の授業にて

(インタビュー日：平成29年1月24日)

● 看護学部のなかの、男性教員として、教養系教員として ●

— 性を意識せずに関わる —

池田 雅則先生（兵庫県立大学看護学部准教授）

2003年 東京大学教育学部卒

2011年 東京大学大学院教育学研究科修了 博士（教育学）

全学教職課程を担当するとともに、看護学部では養護教諭養成や教養教育に携わる。専門は近世末期から近代初期の日本教育史。「大津市立中学校におけるいじめに関する第三者委員会」の調査員や看護系の諸施設での教育学関連の研修の講師を務めたりもしている。



米谷 淳（以下、米谷）：最初に、先生がなぜ教育学を志し、教員になられたかをお話ください。

池田 雅則（以下、池田）：わたしの歩みは世間的にみれば非常に順調で、現役で東京大学に入学しました。大学に入ってから特に壁にぶつかるようなこともなかったのですが、大学の授業やゼミを通して自らの育ちについて考えるきっかけがいくつかありました。ひとつは、ジェンダー論の授業でして性が男女の2つではなく、2のn乗だけありえるということに気づかされたことです。もうひとつは、文化や価値観の同一性を帯びた「国民」が学校を通してつくられるという議論に触れたことです。まさに自分は、たくさんのものを人からいただいた一方で、誰かが意図したことを要領よく身につけた存在で、そして得たものは必ずしも自分の意思で得たものだけでなく、無意識に身につけた習慣、考え方、価値観があったと気づきました。それで、どうやって人っていうのはつくられていくのだろうかという観点から、教育学というのをやってみようかなと思いました。さらに、もともとは歴史が好きだったので、好きなことと課題を重ねるような形で教育の歴史を勉強しました。

米谷：以前、ある大学へ「教師論」の集中講義に行ったことがあります。授業準備をしていて師範学校の歴史がおもしろいと思いましたが、ご興味はありますか。

池田：もちろん興味があります。歴史的にいえば寺子屋とかそのお師匠さんが教えていた時代というのは人間的な一对一の濃密なかかわりが特徴的ですよ。それが近代学校の時代になってくると、1人の先生が前に立って、生徒が対面して座っており、師弟の距離が離れてきますね。あと江戸の教育の場は、統治者としての学問が義務づけられたお侍の学校藩校は別にして、民間の塾は誰からも命じられたり縛られたりすることなく学問を求める人々が通っていました。教室に集権国家の考え方が否応なく入ってくる近代学校と大きく異なります。

米谷：その私塾の研究などの研究から今の大学教員とか、ティーチングに関して、お話できることはありますか。

池田：そうですね、あまり実践に関わらないかもしれませんが、けれど、学問を求める若者

それぞれのニーズや興味に即した教育を提供していたという点では共通しているかもしれませんがね。わたしは全学の教職課程を担当し、看護学部では養護教諭の養成をしています。さらに教職専門科目だけではなく、教養的な科目も担当しています。兵庫県立大学全学部の学生を教えている数少ない教員です。やり方としては、対面の講義やゼミのほかに遠隔授業も行っています。



元喫茶店の貸スペースでのジョブカフェに参加しました

米谷：遠隔授業のシステムはどうなっていますか。

池田：兵庫県立大学はキャンパスが多く、地理的にも離れています。例えば、わたしが所属する看護学部は明石のキャンパスですが、他には、神戸、姫路や西播磨などにもキャンパスがあります。科目の共有というだけにとどまらない、キャンパス間交流としての意味もあって遠隔授業が導入されていると理解しています。

米谷：それはいつぐらいから始まりましたか。

池田：兵庫県立大学になった時からです。

米谷：課題はありますか。

池田：そうですね。高額な通信設備を設置することを考えるからでしょうか。設備は専用教室ではなく、大教室に設置されます。すると他の授業との時間調整が難しくなります。

米谷：オペレーターは別につけますか。

池田：受信側には、大学院生のTAを置いて操作をお願いしています。来年度からは送信側にもTAを置くみたいです。今のシステムは、こちらからもカメラの操作や、画像への書き込みはできますし、質問を受けて、そのまま返すこともできます。三元中継もできるシステムです。

米谷：遠隔授業が長く継続されているのは、順調だということですね。

池田：ともいえないです（笑）。それはやはり試行錯誤があって、これまでもトラブルが多くありました。システムが30分ぐらい止まっちゃったり、さらに再起動が必要になったり。更新の度に改善はされていますが。交流という意義の下で担当者の声を受けながら、なんとかがんばっているというところですね。

授業のやり方については、板書が課題でした。遠隔でやった初めての授業では、資料の情報が不足していたため、補足することを黒板にたくさん書きました。しかし拡大縮小の操作が繰り返されたり画像が粗かったりして、字が小さくて見えないという苦情がありました。翌年からはパワーポイントと大きい字で投影資料を作成することにしました。対面の場合は手書きの板書やOHPの使用でも効果的だけれど、

遠隔システムでは方法を変えたほうが良いですね。

米谷：まさにそれはメディアの問題ですよ。

池田：ええ。初めての年では送信側教室と受信側教室とで授業評価の点数が1点ぐらい差が出ました。今では、あまり差がなくなりました。

また、もうひとつ意識しているのはリアクションも口調も文字も全てオーバーにすることです。もともと学生との距離ができないように、教壇の後ろに立たず、動きながら授業をしていたのですが、よりオーバーにするようになりました。

加えて、これは対面、遠隔には限らないのですが、なるべくグループワークをしてもらっています。200人の学生でもやります。200人もいると「ふり」をして真剣に取り組まない学生もいます。これを防ぐためにグループを作らせた後にグループ単位の出席票を渡します。ですので、グループを作らない学生は出席扱いになりません。

米谷：それはおもしろいですね。

池田：人数が合わずあぶれた学生が、必死になって別の仲間や性別が違う人と組みます。すると今まで話さなかった人と緊張感をもって意見を交流し、刺激を受けるようです。あと教養科目の最終レポートでもグループワークの機会を導入しています。共同作成を可にしています。それで共同で作成した場合は加点をします。「ただ乗り」を防ぐため、学生それぞれの分担を明記させる自己評価シートと一緒に綴じさせます。そして果たした役割に応じて評価を与えています。教員からの評価だけでなく、お互いにも評価し合うシステムです。このやり方をとると、学生たちは友人に迷惑をかけまいと頑張ります。ひとりで書くよりも教育効果が高いと実感しています。何より私にとってもうれしい。レポートの質が向上し量が減少するからです（笑）。

米谷：教職の科目はいくつありますか。

池田：遠隔授業では何科目もありますね。わたしは教育課程論というのをやりますが、他に教育原論、教育心理学、生徒指導論とかもあります。

米谷：養護教諭の資格というのは、4年間の看護学部での学びで取得するものですよ。

池田：そうです。看護師や保健師になるための勉強を教職に必要な専門知識としても読むことができるためです。それに加えて教育学関係の科目が必要です。看護学部の定員は100人ですが、教職は10人に限り希望をとっています。わたしは看護学部では、教職以外にも1回生向けのコミュニケーション論という科目も持っています。

米谷：コミュニケーション論では、実習、演習的なものも入れていますか。

池田：はい。理論的なところも話しつつ、後半で実践的なことを入れています。関わり方の話題では、若い女性のコミュニケーションの特徴を紹介します。若い女性ほどコミュニケーションに積極的である一方、多くの情報ツールに束縛されがちだという傾向が見えます。ここは女性がほとんどなので、あなたたちのコミュニケーションは客観的に見て特殊性があると説明します。ハリネズミのジレンマなども取り上げます。それから感情労働やその結末としてのバーンアウトも扱いました。バーンア

ウトといえば、教養科目の教育学の授業では今年、働き過ぎでバーンアウトした人やサポートが受けられない人の話を聞くといった授業を実施しました。看護の学生も多く出ている授業なので、仕事の質が重すぎて精神障害を発症してしまった元精神衛生福祉士の人をお呼びして話をしてもらいました。そこから自らのキャリアデザインも考えてほしいです。かっちりカリキュラムが決まっている看護系の専門科目の授業とは違って、教養の科目ではいろいろと工夫ができます。

米谷：それは夢ありますね。社会人入学の学生についてはどうですか。

池田：そうですね。やはり社会人入学の学生のほうが意欲は高いですね。高校生から入ってきた学生だと、勉強しているうちに自分の目標を見失ってしまうところがあるようです。社会経験が浅いので、知識や技術を身につけることに精一杯で、自分の将来像に結びつけて学習の意味を想像しづらいようです。その結果、やらされている一本だけになってしまうことがあります。あと、最近聞くのは、やはり経済的な問題でバイトをしなくちゃいけないという学生が増えていることです。

米谷：今は二層ですね。そして若い学生は余裕がなくなっているのです。社会人の指導についてはいかがですか。

池田：成人の学習は難しいところもあります。看護は、いろいろな人の価値観に添いながら働く職業だと思うので、自分が社会人経験を通して培ってきた志、こだわりや価値観への想いが強過ぎると他者の考え方や生き方に寄り添うことができず、自分の主張が表に出すぎて失敗することがあるようです。

米谷：そういう意味では社会経験なしで看護教育を受け、インターンを経て育っていくほうがやりやすいですか。

池田：特に教育する側はそうなのかなと思います。余談ですが、わたしは、ここ何年間か神大病院の看護部でも講義をやっています。成人教育と、研修の作り方というコマです。臨床でも社会人経験を経た新人看護師への指導に困難を抱えているようです。

米谷：そうですね。最後に先生が大学教員として、特に女性の若手の教員や研究者になにかメッセージを送っていただけますか。

池田：わたしなりに考えてみたのですが、学生との関わりで言ったら、性別に関係なく一人一人の悩んでいることだとか必要としていることに寄り添うというのが、ベースなのかなと思います。その上で女性、男性、LGBT等の性に添っていくことだと思います。だから、基本は一人一人の学生、指導生が求めていることをしっかり聞き出し、それに応じた指導をつくっていくことがスタートでしょうか。ここは95%ぐらいが女子学生で、教員も8割以上が女性です。もちろん同僚についても女性としてではなく、同僚としてかかわっています。女子学生に向けては、女性が持つような課題についても理解するように話を聞いています。

米谷：先生は教育学者ですから教育的な要素をどのように看護教育に取り入れていますか。

池田：現在、ここに来たおかげでしょうか、生涯学習の観点から女性の医療職のキャリア

形成の研究をしています。例えば看護師という職業で生きているとしても、どうしても人の一生の中では子育てをする時期だとかが含まれてくると思います。そのようなみんなの悩みの具体性や、やりくりする調整方法が情報として十分に共有できていないと思います。そこで必要なのが



教職の学生からの卒業プレゼントです

ロールモデルですが、今必要なのは、キャリアを中断せず看護の道に突き進んだスーパーな看護師のモデルではなく、「わたしはこうあってもいいのだ」というような形のロールモデルの提示だと思います。

米谷: 困っているながらも何とかしようとした体験を持つ人が、大事なモデルになりますね。

池田: ええ。困っているという声を活字化、意味づけし、伝えることが大事だと思います。わたしが指導し、養護教諭になった卒業生も同じような問題を抱えているわけです。そこでわたしの教え子が集まっていゆるジョブカフェみたいなものを始めました。

米谷: ああ、おもしろいですね。現実的なモデルをお互いが共有できますね。

池田: ええ。だけど、ばらばらで悩んで愚痴って終わらせるのではなくて、それぞれで実現可能な目標を立て合うのです。ある程度同じ職とか同じようなことをやっている人が集まってやるとうまくいきます。けれど近過ぎると話せないこともあるようです。

また、最近是在宅看護だとかの比重が大きくなっているようで、病棟での経験がある方が移行してくるそうです。看護の知識とか専門性を生かして、保育関係の起業をする卒業生も出てきているそうです。つまり看護職のキャリアモデルが多様になっています。そこで、年に1回、卒業生を招いたキャリアセミナーを実施し、看護師、助産師、養護教諭、保健師、起業家、大学院生に話してもらっています。

米谷: いいですね。もう一点質問しますが、看護学部は女性が多数で、池田先生はマイノリティになりますが、何か気づくことはありますか。

池田: まずは、なるべく清潔な風(笑)でいようと思っています。シャツはぴんとしておこうとか、ひげを生やさないようにしようとか(笑)。見た目で距離を置かれてしまつては、そのあとの相談にもつながりません。

米谷: そういうことは大事な心がけですね。そうか、清潔感ね。

池田: また、何年間か働いてきて、わたしが男性であることがいい意味で緩衝材的になっているのかなと感じています。その理由の一つには、看護専門の女性教員と学生は

先輩と後輩であり、教員同士は上司と部下でもあります。下の者は弱みを見せられないのかもしれませんが。資格に関わる分野ですので、評価の拘束力は他より強固にならざるを得ません。だから、看護師でもない自分に相談があるのだと思います。例えば、わたしが具体的なアドバイスをできなくても、悩みを口に出す機会を与えるという意味では、逃げ場というか緩衝材にはなっているのかなと思います。加えてわたしは、座学の科目だけでなく、養護教諭養成課程で演習や実習を受け持っていて、実習する学生の気持ちも理解してくれそうだと思うからかもしれません。

米谷：そのような利害が直接関係ないポジションはすごく大事な役割ですね。

池田：はい。専門の教員一色だと組織って窮屈になるので、別のキャリアと専門性を持つ教養教育の教員の存在は大切だと思います。わたしはたまたまこの組織に置かれたけれど、結果的には有効に働いているのかなと思ったりもします。

米谷：最初のうちは、女性との距離のとり方に苦労しませんでしたか。

池田：難しいです。女性は、男性よりも感情が豊かで表面に出やすいので、時には、琴線に触れる言葉がけをした際に目の前で涙を流す学生もいます。たとえ女子学生に問題があるとしても、最初のうちはわたし自身が引いてしまい、強く指導をできずになんとなく許してしまうところがありました。でも最近は、動じなくなりました。これは周囲の女性教員の指導に学ばせてもらったところです。最初のうち、たじろいでしまっていたのは、女性という目で学生を見てた部分がすごく強かったからだだと思います。もちろん権力を持った教員として使ってはいけない言葉や、かわり方はありますけれど、最近は自然に性別をこえて一人一人の学生とかかわれるようにはなってきたのかなと思います。

米谷：興味深いお話をありがとうございました。

(インタビュー実施日：平成29年1月12日)

無意識の思い込みと心の壁

横山 由紀子先生（兵庫県立大学経営学部教授）

京都大学大学院経済学研究科博士後期過程単位取得退学。博士（経済学）京都大学。神戸商科大学経済研究所助手、兵庫県立大学経営学部講師、准教授を経て、2016年より現職。専門は労働経済学および社会保障論。女性の経済的自立を主な研究テーマとし、女性の就業意識や就業行動について調査・分析している。兵庫県職業能力開発審議会委員等。



米谷 淳（以下、米谷）：先生は経営学のご出身ですか。

横山由紀子（以下、横山）：いいえ、経済学です。でも、もともと大学に入ったときは文学部でした。3年次に経済学部に転部し、経済学のおもしろさを初めて知りました。

米谷：最初はどんな文学に興味があったのですか。

横山：具体的な興味はなかったのです。ただ、高2の時に、大学の文学部の先生の講義の中で、「法学とか経済学は勉強で、文学こそ学問だ」という言葉にすごく心動かされました。ただ、それはあくまで高校生だったからで、今では法学も経済学も学問だと認識しています。

米谷：その後、大学で経済学に目覚めたのですか。

横山：勉強し始めてからですね。大学3年生のときに、社会保障の先生のところで勉強をしました。その先生は、考える力、本質を見抜く力を持った方で、とても感銘を受けました。

米谷：社会保障の中でも先生の御関心はどういうところにあったのですか。

横山：修士のときは保育でした。そのときは、保育のことがまだ問題になってない時期で、社会保障と女性就業と子どもをテーマにしました。その後、労働経済学を研究するにしたがって、もともと興味を持っていた女性の経済的自立に研究が進んでいきました。

米谷：大学院時代に先生がおやりになっていた手法が、今、先生がゼミ生に教えてらっしゃるアプローチにつながるわけでしょうか。

横山：あまり私の研究と授業が直接関係するということはありません。私の授業は労働経済学関係ですが、結局のところ学生が勉強として覚えた知識はいつか忘れるので、それよりは考え方を身につけてほしいと思っています。研究の中で常に意識しているのは、統計資料でも、新聞でも、読者は鵜呑みにしてはいけないということ。学生には、まずは客観的に資料を見て、自分で考える力をつけて欲しいと思います。そして、そこには必ず思い込みがある。無意識の思い込みがあると物事がうまくいかないし、数字だけが読めても解決できないことがあります。普段の授業では、その2点を意識するように指導しています。

米谷：先生のホームページを見させていただくと、そのような記述がたくさんありますね。ゼミ中心、少人数教育でおやりになっていらっしゃる。例えば課題探求。自分で考える力をつけるために、先生はどのような介入やフォローをしていますか。



横山：私のゼミでは、ゴールが見えてしまわないように、私の意見はなるべく言わないようにしています。学生は自由なテーマで、まず自分で考え、発表し、その場にいた学生がディスカッションをします。こうして普段から考える癖やコメントする力を身につけてほしいと思っています。

米谷：データワークが中心の経済学的なアプローチですね。

横山：はい。あとは書籍の先行研究をやります。

米谷：そして、批判的思考を鍛えられておられるのですね。

横山：ここ二、三年で講義でもスタイルを変え、ゼミ的な方法を用いた時間をとっています。また、高校生向けの出張授業のときも、考える力を身につけてもらうという意味で、統計を用いて反論するという練習をしてもらいます。

米谷：統計などの数字にだまされない思考については、谷岡一郎先生の『「社会調査」のウソ・リサーチ・リテラシーのすすめ』という本は、面白いですね。

横山：はい。最初はまさにその本をベースとして、その後いろいろと身近な例を集めて、そして、最近は学生に合わせてアレンジした内容を作るという形でやってきました。

米谷：サンプリングの手続き一つで、結果がどうでも変わるという話も谷岡先生の本に書かれています。先生もやられますか。

横山：はい。よくやります。学生の反応もよく、「目からうろこ」みたいな感じです。学生の「へえ」という言葉が出る瞬間がいいですね。

米谷：あの瞬間は、「待ってました」と思いますね。先生がおっしゃるように、答えを教えないで、自分たちで考えさせてというのは、重要ですね。あとはうまくいったらほめますか。

横山：はい。ほめると自信につながるのがよくわかります。一つのことをほめると、それが自信となって他のことも向上させようとチャレンジする姿をよく目にします。

米谷：県立大学に来られて、もう15年ぐらいになりますが、県立大学の学生のイメージはどのような感じですか。

横山：すごく素直な子が多いですし、大変優秀な学生もいます。公立大学ですので、様々な事情で遠くの大学に行けなかったとか、浪人ができないから確実に受かる県大に

来たというような学生もいて、こうした学生は大変優秀です。一方で、経済的に自活している学生もいて、中にはアルバイトをしすぎて単位が取れていなかったり、いつも眠そうだったりする学生もいます。でも、そういった学生がいることで、全体的に何か強さがあるように感じます。

米谷：研究というよりも、実学が中心ですか。

横山：そうですね。素朴に真面目にやっている感じですが。でも、教員として彼らと接するのはすごく楽しいです。ポテンシャルがそれなりにあるけれど、まだ磨き切られていない子が結構いるので、ちょっとした刺激ですごく伸びることがあります。以前は、教室全体の平均的なレベルを少しでもアップできれば、と考えていましたので、アドバイスも全体的な一般論が多かったのですが、最近は方針を変えました。応用科目ということもあり、受講生の人数もそれほど多くないことを活用し、できるだけ個々のケースに対してアドバイスするようになりました。すると、中には見違えるように急激に伸びる学生がいて、それが他の学生への刺激にもなり、その波及効果がとても大きい。教育が楽しいと思える瞬間ですね。

米谷：先生のゼミは何人ぐらいいらっしゃいますか。

横山：2年生、3年生、4年生でゼミはそれぞれ10人ぐらいです。

米谷：2年生の場合は、必ずしも先生のゼミに上る学生ばかりではない。

横山：そうですね。半分ぐらいです。今の4年生ゼミは男の子ばかりです。結構はっきり指導しますので、きついことを言っているつもりはないのですが、女の子からは怖いイメージがあるのかもしれない。ただ、最初に来ていないところを指摘したうえで、プレゼンの改善策や、文章の書き方など、細かなところを具体的にアドバイスすると、学生自身も成長を実感しやすいので自信につながるのかな、という印象です。

米谷：それはゼミの中で先生が声かけされますか。それとも、個別に呼んで話をしますか。

横山：両方やります。ただ、大抵のアドバイスは他の学生の参考にもなりますので、なるべく全体で行います。また、最近、授業のスタイルを講義形式からディスカッション形式に変えました。おとなしく、発言しなかった女子学生に発言の機会を持たせると、急激に成長したこともありました。中学・高校の体験から目立つことを避けている学生が、心の鎧を外し、自分の意見を言ったとき、ぐっと伸びるようです。また、向上心を素直に表に出せる学生がいて、その学生が急激に伸びていく過程を目の当たりにすることで、他の受講生や全体の雰囲気も変化していきます。そういう意味では学生同士の刺激が一番効果的で、私自身の役割は、成長したいという気持ちを持たせる場の雰囲気作りをサポートすることだと思っています。

米谷：おもしろいですね。

横山：待つのが大事な部分もありますが、タイミングよく刺激を与えることも重要で、そこがとても難しい。でも、最近はそのような教育がすごくおもしろくなってきました。

米谷：学生は研究指向ですか。それとも、実行（実学）指向ですか。

横山：県大の経営学部では大学院に進学する学生はそれほど多くありませんので、メインは社会で活躍できる人材の育成となります。

米谷：人材育成ですよ、どっちかという。社会で活躍する経済人。そうすると授業は、学生がまず問題を発見するところからスタートするのですね。

横山：そうですね。私が講義するのではなくて、記事を読ませて、頭だけではなく、心が感じる違和感によって本質を見抜く力を養いたいと思っています。違和感に気づくことができれば、本質的な議論になります。学生の議論では、頭だけで考え、正論だけで戦う場合が数多く見られます。それだと社会を動かすことはできないので、自分の心が感じる違和感とか、自分の思い込みを認識しながらディスカッションすることを促しています。

米谷：そういう違和感を上手に育てて、研究とか、あるいは社会に何か貢献できるような切り口を見つけて、自分で何か成果を出していこうという指導は、3年になってからですか。

横山：それは、学年に関らず、授業でもゼミでも常に意識しています。

米谷：例えば、男性が自分の男性社会の問題点みたいなものを改めて考え直すようなこともやったりしますか。

横山：はい。いわゆる男性学というのを、授業でも扱います。女性労働とか、男女共同参画については、男子学生は他人事だと思っているようです。そこで、男子学生に自分達の問題として直接アプローチする方法として男性学を取り入れています。そのせいか、男子学生の今年の卒論テーマに、男性の育休とか、ワーク・ライフ・バランスなどもありました。

米谷：男女共同参画の問題は、そういう指導なら、男子学生にも様々なテーマを考えさせることができると思いますね。

横山：そう感じています。また、話し合いをさせた後に放置せずにまとめることも必要だと思えます。労働問題について、2年生、3年生、4年生と一緒にディスカッションさせると、当然4年生のほうが意識もしっかりしていて議論をリードします。ただ、逆に社会を知ってしまったことで凝り固まった意見になり、正社員だから遅くまでばりばり働くのは当たり前だといったような、昔戻りの現実的な思考になることがあります。

米谷：ステレオタイプ化するということですね。

横山：はい。社会を知り始めた4年生ほど、「それは理想ではあるけれど、現状では難しい」と下級生を牽制することがあります。そこで私がいつも言うのは、「現状では難しいから無理だ」というのではなく、まずはゴールを決めて、どうやって、理想の状況に近づいていくべきなのかを考えることこそが大学生の議論だということです。また、大学に来られるような学生は社会に対する認識、格差とか貧困に対する危機感が足りない傾向があるので、そうした問題への危機感をあおるように意識しています。

米谷：先生が若手のこれからの大学教員、あるいは、もっとキャリアを積んでいく若手女性教員の人たちにメッセージを与えたとしたらどんなことがありますか。

横山：私は、30歳と40歳で10年間をあけて二人の子供を出産しました。身近な周囲の先生方には今も以前も常にサポートし



ていただいています。比べてみると、今の大学の環境はすごく両立しやすくなったという実感があります。それに加えて、自分自身にも変化がありました。1人目の子育てのときは、子供がいることをあまりアピールしないよう行動することを心掛けていました。でも、それではだめだと気づきました。自分が我慢すればそれでいいわけではなく、次の世代につながる行動をとるべきだと最近では思っています。男性社会のなかで男性として働くのではなく、ものごとへの費用対効果を意識することが大事だと思います。容易にできること、大変な思いをすればできるけれどもあまり効果がないこと、頑張ってもできないこと、といったことを自分で判断し、それを周囲に伝える。自分の心の持ち方を変えたことで、今では周囲の先生にサポートをお願いをする心のハードルが下がり、とても働きやすくなって、10年前よりもずっと生産的になったと思います。そして、実はこうした自分の心の変化も、理解ある男性の先輩教員の存在やサポートによるところが非常に大きいです。

米谷：最初は、ガードがちがちで頑張っていたのですね。

横山：はい。もっと女性の割合が増えたら、もっと無理しなくてもよくなると思います。女性比率が1割と3割では全く違うので、女性が多ければもっと自然体で働くことができると思います。

米谷：二、三年前に授業のスタイルを変えられたそうですが、その理由をお聞かせください。

横山：それまでは講義中心のスタイルで、私がスライドを準備して話をしていました。そうすると、ぼんやりしている学生も必ずいて手応えが少なかったのですが、双方のやり取りを入れると手応えを感じ、アドバイスすることの重要性にも気づきました。ただ、大人数のなかでアドバイスや注意をすると反感を持つ学生もいて、アンケートに「ああいうのは聞いていて嫌だ」とか、「先生の指摘の仕方、口調が嫌いです」と書かれることもあって、私もアドバイスすることをちょっと自制してしまいました。そこで、毎年第1回目の授業の最初に「この授業はディスカッション中心で居眠りも私語もなし、更には人前でアドバイスを受けることを嫌がらないこと」を受講条件として提示しました。受講生はその条件を受け入れた学生だけとなったことが功を奏しました。受講する学生は、「この授業では自分が活躍してもいいん

だ」という気持ちになったようです。そして、私自身も、心の壁が取り払われ、自然体でいられるようになりました。

米谷：それって必修科目ではなかったということですね。

横山：そこは大きいです。やっぱり必修科目ではないからできた授業スタイルです。

米谷：講義方法に関して、先生自身が女性であるということと何か関連はありますか。

横山：女性のほうがきつく見られるとか、もしくは、楽勝科目だと思われやすいということで以前は変な気負いがあった気がします。講義スタイルを変え、私らしく指導するようになると、特に女子学生が積極的に意見を言うようになりました。

米谷：最初のころは僕もびくびくしていて、授業ノートに全部記録していましたし、授業がつまらないといわれたら、次の機会はおもしろく思わしてやると思った熱血時代もありましたが、少しずつ変化していきました。

横山：私もまだまだ成長できるよう頑張ります。

米谷：これからも頑張ってください。ありがとうございました。

(インタビュー日：平成28年12月20日)

6人の素敵な先生との対話を終えて

インタビュー：神戸大学大学教育研究推進室室長 米谷 淳

男女共同参画推進室の依頼で、6人の先生にインタビューする機会を得た。インタビューに応じていただいた5人の女性教員と1人の男性教員は、誰もがそれぞれの研究と経験を生かして授業づくりをしておられ、教育と研究への熱い気持ちと真摯な姿勢と大学生への暖かくも鋭い眼差しを感じた。以下、インタビューを振り返り、各教員の印象をまとめ、コメントする。

ツェンコヴァ・ルミアナ先生は努力と工夫のブルガリア人である。モスクワに留学した時、ロシア語が全然通用しなくて、研究しながら覚えた。日本でも研究の必要に迫られて日本語を覚えた。神戸大学では日本語で授業をしているが、ワークショップ形式で学生と一緒に授業を準備する。これは苦勞しながら編み出した方法であるという。大学教員になるため、努力と工夫で道を切り開いて来たが、「一人でできるとは思わずに、自分のやりたいことをはっきり見せることも大事」と語る。「天は自ら助くるものを助く」を文字通り生きている。

林良子先生は文理融合を地で行く、多才なマルチリンガリストである。東京外語大学の学部と修士課程でドイツ語を専攻し、ドイツへ留学した。その後、音声学の研究を続けるために東大大学院に進み、最先端の脳研究で医学博士を取得。留学中に知り合ったイタリア人と結婚し、日本とイタリアを往復する。最近はイタリア語の本を書くまでになった。脳研究のための生理学は研究の必要に迫られて学んだ。イタリア語も生活の必要に迫られて学んだ。就職に際しては色々苦勞したが、英語教育だけでなく日本語教育の資格や経験があることが幸いして大学に職を得たという。大学生は是非とも海外留学すべきと語る林先生の生き方は、「多分野=多文化(=多言語)」を物語っている。

日浦直美先生は、絵に描いたような女性教員のロールモデルの一つを体現されている。様々なキャリアを経験しながら、何かに導かれるように大学教員の道を進んでいった。日浦先生はその時々感じた違和感を原動力としてパワーもキャリアもアップさせた。OL時代に感じた女性のキャリアイメージに対する違和感や、白いスーツに赤いボールペンで落書きした小学1年生についての児童相談員の態度に対する違和感が大学教員のキャリアにつながっている。保育者養成と幼児教育研究の第一線で活躍されている現在、「準備は100でも、時々保育の現場での感動した体験や子供から学んだことを交えながら、65か70ぐらいの授業をやっています」と語る。こうした人を思いやる柔らかな姿勢は幼稚園教諭として幼稚園児に接していた若い頃と変わらないのだろう。

西村智先生は、エネルギーで上品さを失わない関学ガールの模範と言える。関学で労働経済学を専攻し、フランス留学後、母校で教員となった。経済学からジェンダーを研究しており、ヨーロッパでも「女性の背中を押してあげることが大事」にされているという。「ゼミでは上品に人を押しのけなさい」と学生に言っている。ゼミ指導は熱い。個人

指導を大事にする。「良い発表は段取りが命」と、1時間もすることがある。「若いときは、そのバランスがむちゃくちゃだったと思います。でも失敗を繰り返して、改良して改良して、やっと今、ちょっとだけ落ちついてできるようになったという感じ」と語るが、相変わらずクリエイティブなことが大好きで、授業もイノベーションし続けているに違いない。

池田雅則先生は「まっとうな」教育学者である。私塾研究で優れた業績をあげている一方、遠隔授業や大人教授業で苦勞しながら創意工夫でなんとかしようとしてきた。看護学部のため、学生、教員ともに女性がメジャーなので、「なるべく清潔でいよう」と努めながら、「男性であることが緩衝材的になっている」と自覚し、持ち味の優しさと人当たりのよい人柄、教育者としての熱さ、一級の教育学者の学識と見識により学生に慕われ、気軽に相談できる先生になっている。

横山由紀子先生は恩師の背中を追い続けている。大学3年の時に優れた経済学者に出会って経済学に目覚めた。「その先生は考える力、本質を見抜く力を持った方で、とても感銘を受けました。」ある時から授業のスタイルを講義形式から討議形式に変えたのも、学生に「客観的に資料をみて、自分で考える力をつけてほしい」から。「記事を読ませて、頭だけではなく、心が感じる違和感によって本質を見抜く力を養いたい。」このように語る横山先生は、まさに自分が大学3年で出会った先生の姿を学生に対して示すことで、「本質を見抜く力」をもった経済人を育てようとしている。

以上6人の先生と出会い、教員のキャリアや授業について語り合うことで思ったことは、全員共通して、教えること（講義・ゼミ）、学ぶこと（学習・研究）、生きること（生活態度、人生経験）が三位一体となっているということである。研究が教育を支え確固たるものにし、人生経験が授業に深さと面白みという味わいを生む。こうしたことを改めて確認でき、大いに刺激される対話となった。

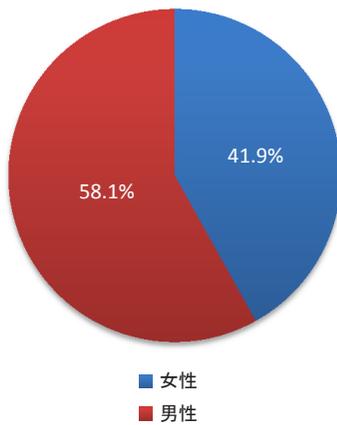
第3章

ティーチングスキルアップアンケート

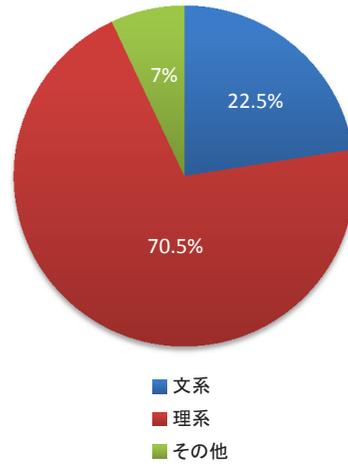
女性研究者研究活動支援事業（連携型）の一環として、平成28年12月末から平成29年1月末にかけて、神戸大学及び兵庫県立大学の全教員に対し、ティーチングスキルアップに関する、WEBアンケート調査を実施しました。アンケートは2部構成で、ここでは、I部の8つの設問に対する集計結果を示します。

アンケート集計結果

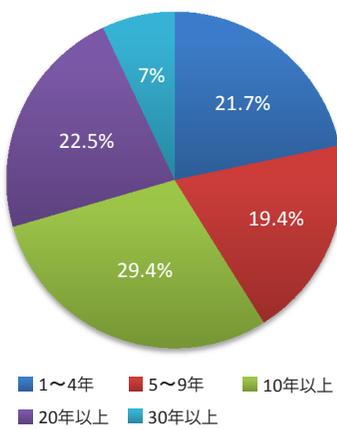
設問1：性別



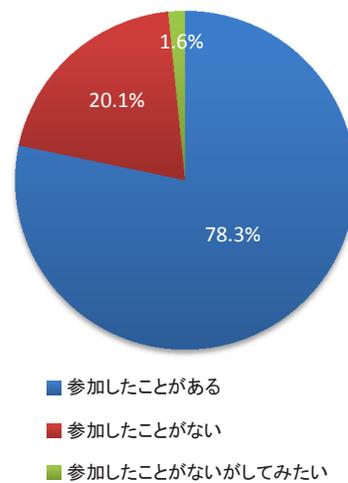
設問2：専門分野



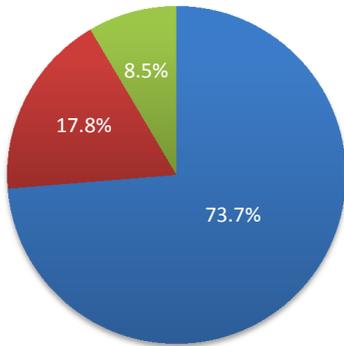
設問3：講義経験年数



設問4：大学が実施しているFDIに関する研修に参加したことがありますか？

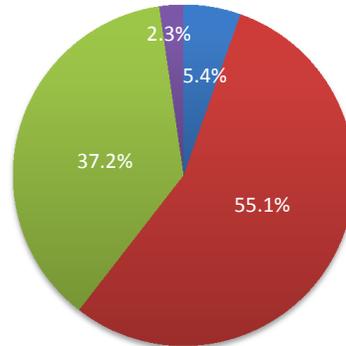


設問5：他の教員の授業を参観したことがありますか？



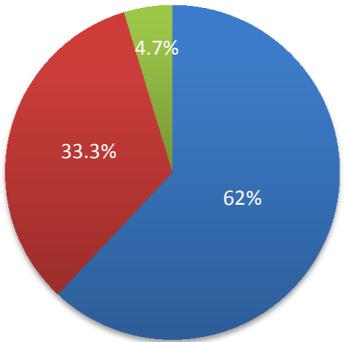
- 参観したことがある
- 参観したことがない
- 参観したことがないがしてみたい

設問6：ご自身の授業方法に自信を持っていますか？



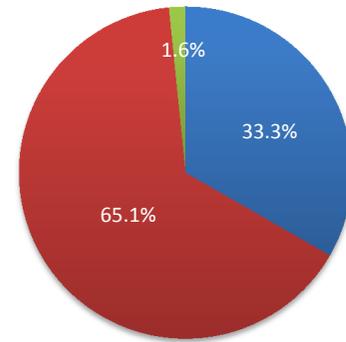
- 自信がある
- それなりに自信がある
- あまり自信がない
- 全く自信がない

設問7：他の教員に授業方法について相談したことがありますか？



- 相談したことがある
- 相談したことがない
- 相談したことがないがしてみたい

設問8：女性教員（男性教員）であることを意識したことがありますか？



- 意識したことがある
- 意識したことがない
- 意識したことがないがしてみたい

アンケート設問8で「常に意識している」、「時々意識することがある」と回答した教員の「どのような場面で意識されますか？また、どのように対処されていますか？」に対する回答を以下に掲載します。

【女性教員の回答】

- 女性教員だからということではないかもしれませんが、子育てがあるため、時間的制約と子どもの発熱など突発的なことに対処せざるを得ない状況を常に意識しています。仕事の優先順位をつけながら、なすべきことに不足が生じないよう、できる限り前もって行動するようにしています。(女性・その他・2年(講義経験年数))
- 年齢、同居人・配偶者の有無、結婚の意思、衣服・化粧品について質問あるいはコメントされる。
学生相手なので無視することも難しく、やんわりと回答を拒否するが、私的な質問をされるたびに、女性ジェンダーに基づいたまなごしを意識させられる。
(女性・文系・3年)
- 講義等ではないが、女子学生から進路等について相談される。
結婚、子育てをしながらの仕事の継続などについても聞かれることが多い。
出来る限り、親身になって相談にのるようにしている。(女性・理系・5年)
- 残業をしたいが、家族や家庭のことを考えて帰宅する時には、男性であればどうしたかと考えることがあります。(女性・その他・5年)
- 女性であるが故に家族内役割として子育てや介護を担っているが、その比重は男性より大きいと感じ、それに対して職場から急な時は休んでいいよと言う声かけがあるが、言いだしづらいのが実情である。こういった言いだしづらさは前職場ではなかった。いわゆる職場風土により働きづらさを感じている。それにより異動してきてから非常に仕事と家庭両立の困難感を覚えている。困っている事情を具体的に伝えても規定のため対応できないといった一言で片付けられてしまい、女性支援を本当にやる気があるのか疑問に感じる。(女性・理系・7年)
- 子育て中のため、どのようにワークライフバランスを保って行けばよいかいつも悩ましい。(女性・理系・9年)
- 服装や言葉遣い、化粧品、髪型など、女性を全面に押し出しすぎないよう気をつけている。清潔感を第一にし、相手(学生も含め)に不快感を与えないよう気をつけている。
(女性・理系・13年)
- 女子学生に不愉快な思いをさせないように気をつけているつもりです。
(男性・理系・14年)
- なめられる。毅然と対処。(女性・理系・15年)
- 女性教員であるので優しいのではないか、話しやすいのではないかと考える学生に接した際に、受け取り側にそういった意識があるのだと認識させられた。
(女性・理系・15年)
- 学生と話し合う場面において意識している。学生の性別や個別の特性に応じた話の内容

や言葉の使い方を工夫することで、学生が男女を問わず、のびのび発言ができ、お互いの存在を尊重できるように努力している。(女性・文系・16年)

- 回答に、常に意識している、時々意識するという項目はないのですが。
(女性・その他・20年)
- 日々の生活に勉強することが何かにつながっていることを母親目線で話す。
(女性・理系・20年)
- 現在、小学生女兒を育児中で、日頃から小学校の学校行事にも参加し、ママ友とも毎日のように交流しているため、子供から見た授業、母親から見た授業、教員から見た授業といくつかの視点を持ちながら自身の授業運営、授業進行を行っているため。
(女性・文系・24年)
- 特に若い頃、男子学生がほとんどをしめる200名ぐらいの講義を担当していた。そのときは、気合というか相当気力を充実させて講義をしないと全体を掌握できなかった。全体を掌握できないとどうなるかということ、おしゃべりが絶えない、ということになる。また、学生からのストーカー被害にもあったことがあり、その後数年は講義をするのが怖かった。(女性・文系・25年)

【男性教員の回答】

- 学生と個人面談などで対応をする時や性差に関連する内容について、講義をする時。
(男性・その他・2年)
- 女子学生との身体的な接触が必要な場面で意識する。事前に同意を得てから実施する。
(男性・その他・4年)
- 女学生に対してはオープンな場で指導をするよう心掛けている。(男性・理系・5年)
- 私が男性教員であることは自覚しているが、学生あるいは授業において支障があったことはないと思う。
質問項目の意図がどういった意味であるのかがわかりにくい。(男性・文系・9年)
- 意識をしないようにしている。(男性・理系・10年)
- 受講生の男女比が偏っている時。(男性・理系・20年)
- 女性教員が学生からハラスメントを受けたと聞いた時にそう感じました。
(男性・文系・20年)
- 講義・演習などで、風呂、トイレ、寝室、夫婦関係、女性に関連する禁忌のことを話すとき。(男性・理系・25年)
- 相手が女学生の時に男子学生と同等に扱えないことがある。(男性・理系・20年)
- 女子学生に対するものの言い方には気をを使う。(男性・文系・20年)
- 男子学生が多い授業において、意識することがある。(男性・理系・28年)
- セクハラなどでトラブルを起こされないように特に女子学生に対しては隙を見せないように用心する。こちらがセクハラをしなくても、様々な隙を捕らえて意図的に恐喝の材料にしようとする女子学生がたまにいるので要注意。(男性・理系・30年)

ティーチングスキルアップに関するアンケート

アンケートは【I】設問と【II】自由記述から構成されています。回答はどちらか一方でも可能です。

【締め切り】 平成29年1月31日（火）

【I】設 問

以下の設問について、当てはまるものを選択し、回答欄に数字を記入してください。

1. 性別 ① 女性 ② 男性 ③ その他 回答（ ）
2. 専門分野 ① 文系 ② 理系 ③ その他 回答（ ）
3. 講義経験年数（ 年）
4. 大学が実施しているFDに関する研修に参加したことがありますか？
 ① 参加したことがある ② 参加したことがない
 ③ 参加したことはないが、してみたい 回答（ ）
5. 他の教員の授業を参観したことがありますか？
 ① 参観したことがある ② 参観したことがない
 ③ 参観したことはないが、してみたい 回答（ ）
6. ご自身の授業方法に自信を持っていますか？
 ① 自信がある ② それなりに自信がある
 ② あまり自信がない ④ 全く自信がない 回答（ ）
7. 他の教員に授業方法について相談したことがありますか？
 ① 相談したことがある ② 相談したことがない
 ③ 相談したことはないが、してみたい 回答（ ）
8. 女性教員（男性教員）であることを意識したことがありますか？
 ① 常に意識している ② 時々意識することがある
 ③ 全く意識しない 回答（ ）

※①及び②と回答された方にお尋ねします。

具体的に、どのような場面で意識されますか？また、どのように対処されていますか？

【Ⅱ】自由記述

授業に関して、技術面・個人的体験など、教員仲間へ伝えたいこと、勧めたいことについてどのような内容でも結構ですので、ご自由にお書きください。

なお、字数に制限はありません。1行でも、何字でもかまいません。

原稿は、編集せずに性別、分野のみを加えて、そのまま掲載させていただきます。

以下にいくつかキーワードをあげましたが、その他でも結構です。また、いくつでも結構です。

心構え、目標、成功談、失敗談、工夫していること、講義資料、講義ノート、シラバス、パワーポイント、レジュメ・資料、試験、声の大きさ、板書、機材、服装、携帯電話、私語、遅刻、早退、出席率・・・

ご協力ありがとうございました

第4章

教員仲間に伝えたいこと，勧めたいこと

「ティーチングスキルアップアンケート」のⅡ部の自由記述欄「授業に関して、技術面・個人的体験など、教員仲間に伝えたいこと、勧めたいこと」に対する回答を性別、専門分野別に分類し、受領した順に、原文のまま掲載します。

■ グループ I : 女性・理系

1. 女性・理系・1年（講義経験年数）
講義資料をテキストと連携させたものにしないと学生が困惑している。
2. 女性・理系・2年
心構え。
3. 女性・理系・2年
経験を重ねることでより授業の内容も魅力的な物になるだろうと思う。学生の反応がいいところをチェックして次回にいかせれるよう改善している。
4. 女性・理系・5年
内容が多いので、なるべくレジユメを作成し、講義開始時に配布している。声は大きく、重要なポイントに絞って、解説するようにしている。
5. 女性・理系・6年
学生として神戸大学の教員の授業を受けた経験があるので、一方通行にならないように、学生とコミュニケーションを取りながら授業を進めている。
6. 女性・理系・6年
 - ・ピアレビューで他の先生方の講義を拝見すると、パワーポイント資料が文字のみの場合（数学などの特別な例を除く）がかなりあり、自然科学系の情報伝達として、それで良いのかと疑問を持つことがある。
 - ・1～2年生は講義に受け身であることが多く（高校の延長）、積極的に質問しようとしない。こちらから質問するようにしているが、返答せずに黙ってしまったり、テストに記述式の問題を出すと正答率が低い傾向があり、考えながら受講していない学生への教育方法が悩みである。
7. 女性・理系・7年
講義資料。
8. 女性・理系・9年
大人数の学生を対象とした講義は、学生との双方向性を作るのが難しい。
9. 女性・理系・10年
レジユメを配布するようにしています。
10. 女性・理系・10年
受講者数にもよりますが、できるだけ参加型になるように心がけて準備すると、学生たちの反応は良いように思います。講義資料やパワーポイント、レジユメ等は見やすさを優先して（字体、大きさ、色味等）作成しています。
11. 女性・理系・10年
最近講義はパワーポイントで見やすくする方がよいとされますが、様々な理論などを説明する場合には、学生にスマホで写真を撮らせるのではなく、板書をして数式の

意味を理解してほしいので、数式が書かれていない講義ノートを学生に提供して、学生が少しでも手を動かして理解するようにしています。

12. 女性・理系・13年

自分で勉強すること、向上心を忘れないこと、そして学外の授業が上手な教員やメディア関連の方・講演が上手な講師の方などから常にスキルや姿勢を学ぶことが大事だと思います。私は、自分が学生が人前で話したり、カウンセリングをするためのスキルを教えている立場なので、とくに自分自身の技術や人間性などを常に磨くよう心掛けています。

13. 女性・理系・15年

ゆっくり話す。一回の授業内容の適正な量。

14. 女性・理系・15年

英語での授業を求められるようになってきます。

アメリカの大学コースで1週間くらい、授業のスキルアップをするようなセミナーがあると思うのですが、そういうのに参加できるようなチャンスがあればありがたいです。

15. 女性・理系・18年

講義時間の10倍、準備に時間をかけるというのを聞いて、実践するようになってから、学生アンケートの点が高くなりました。

16. 女性・理系・20年

声の大きさ。話し言葉に親しみを感じるように努力する。私語をできるだけなくすように努める。引き込む授業を心がける。

17. 女性・理系・20年

シラバスに沿って行うことは心がけている。パワーポイントを用いながらの授業が多いが、学生が受け身になりがちなので、()書きなどを入れて、書き込ませるようなこともさせている。ただ、e-learningの手法を用いるなどのことがなかなかできず、また振り返りのさせ方などについても勉強できればと思っている。

グループⅡ：女性・文系

18. 女性・文系・1年

まだ1年しか授業を担当しておりませんので、教員仲間へ勧められるような内容がありません。自分の授業のスキルには不安を感じており、経験豊富な教員からアドバイスが受けられる機会があればいいなと思っています。

19. 女性・文系・3年

- ・情報や知識を正確に伝えることと同じぐらい、学生が主題について自発的に関心を持つきっかけとなる講義を心がけている。
- ・学生それぞれに得意なアプローチが異なると考え、映像資料の読解、ディスカッション

- ョン、ミニエッセイなど一連の講義のなかで数種の取り組みを行っている。
- ・出席管理をしなくてすむことが理想（教員心理的にも）。
 - ・授業直後の手応えを（良かったにしろ悪かったにしろ）信用し過ぎないようにしている。

20. 女性・その他・4年

上位教員の先生方の授業に入らせて頂いて、臨床の事例に基づいている方が学生が関心をもってきているようにみえ、また後日学生達から事例とともに話された事柄は一生忘れないという話をきき、自分自身もそのようにしたいと思った。

21. 女性・文系・10年

まだまだ、大学は男性社会だと思う。密室化しているため、表面化しないセクハラやパワハラが実際にはあるし、体験している。

22. 女性・文系・11年

講義では1コマに入れる情報量が多すぎ、話し言葉の1文も長すぎると自覚しているのですが、減らすこと、短くすることが難しいです。コツがあれば教えていただきたい思います。パワポを使いますが、スクリーンを使うと状況に合わせて書き足すための板書が見にくくなるので、改善策がないか探しています。

23. 女性・文系・12年

講義は試行錯誤で、同じ科目の講義でも、毎年異なる方法を試しています。

24. 女性・文系・13年

技術が進歩するにつれて、（自分自身が大学生の時と比べて）学生のライフスタイル、人生観、大学観も大きく変化しています。「自分が大学で習った・学んだスタイルを用いて、学生を教えない。過去の自分を今の学生が超えていけるように指導する」ことが大切だと思います。

25. 女性・文系・16年

毎年、新しい内容を盛り込む、伝え方を考えるなど、学生の意欲の芽が育つよう、授業を再考しています。教える内容の質をよくしようという情熱が大切だと思います。

26. 女性・文系・25年

私語については、講義の始めて静かになるまで講義を始めないようにしている。また、それでも講義中におしゃべりする学生はレポートを提出、あるいは返却時に名前を覚え、名指しで静かにするように注意している。

27. 女性・文系・30年

他の教室で遅く始まったり早く終わって廊下などがうるさくなると、学生もそれぞれしますが、最後までその日の課題を終えるまでしっかり集中させる工夫をする。

28. 女性・文系・30年

配布資料を前もってBEEFにアップしていますが、1限の講義で先着30名に印刷したものを配布すると、遅刻者がいなくて気持ちよく講義できています。

29. 女性・文系・30年

教師が教えたつものことと学生が学ぶことは違うということを常に意識して、どうやったら学べるかを考え、理解のレベルを時々チェックする。資料は多すぎても少なすぎても効果がないので、渡す量とタイミングを考える。学生の多様性を意識し、人によって学び方が違うので、多様な学習スタイルに合うように、教え方も多様なやり方を使う。声の大きさ、スピード、学生一人一人への視線、などを意識する。

30. 女性・文系・30年

少なくとも授業開始時間の10分くらい前に講義室に行って、マイク、プロジェクター、パソコンなどのセットをします。授業がはじまってからパソコンがうまく動かなかったり、マイクの調子が悪かったりしてあわてたことが何度もあるためです。

グループⅢ：女性・その他

31. 女性・その他・2年

講義の経験が浅いため、他の先生方の授業構成や展開の仕方から学ぶことが多々あります。

32. 女性・その他・4年

現在、有志で集まり、インストラクショナルデザインの勉強会を開催しています。より良い講義の提供を目指して、教員間で情報共有、ディスカッションができるなどと思います。

33. 女性・その他・5年

現在、学内中心に授業についての勉強会をしており、ここで他の教員から意見をもらったり、教育方法を見たり聞いたりすることを通じて自己研鑽しています。これはとてもありがたく貴重な時間になっています。

34. 女性・その他・20年

講義を受けている学生の反応や学生からのフィードバックを受けて、適宜授業内容や方法を修正・追加等している。

35. 女性・その他・28年

入試で優秀な高校生に入学してもらい、大学生として優秀な成績で卒業してもらい、社会で活躍してほしいと願っております。

グループⅣ：男性・理系

36. 男性・理系・1年

アクティブラーニングを心掛けています。

37. 男性・理系・3年

普通の座学の授業はMOOCsで将来置き換わってしまい、学生がわざわざ大学に来る必要がなくなる時代が近いと感じる。実習のような学生自身が何かに取り組む授業を

増やしていくべき。現状の教員数では難しいが、教員数が増えれば、そのような対策も可能だと思う。

38. 男性・理系・5年

理解度は発言しない学生ほど低い傾向にあるので積極的に個別に話しかけるようにしている。(少数の場合)

39. 男性・理系・6年

パワーポイントで映写した資料全てを欲しがる学生が増えていると思います。講義内容を聞き取ってメモ(あるいはノート)をとる習慣が乏しくなっていると思います。

大人数(受講登録者数が180人程度)ですと、学生の主体的な参加を促すことが難しいです。

学生間の討論・議論を伴う講義では、授業の際の座席を毎回入室時のくじ引きで決めるというアイデアを、他大学の教養系科目の担当教員に聞いたことがあります。発言する人と発言しない人が偏ることを防ぐ効果があるようです。

40. 男性・理系・6年

昨今、小学校からタブレット端末や電子黒板等を使用した授業が導入されつつあり、このような教育を受けた学生が、今後、大学に進学してくる際に、どのように大学の講義で対応すればよいか悩んでいる。

41. 男性・理系・6年

私の場合、約30年の実務経験を経て大学教員になった、という背景があるのですが、大学で学んでいることが実社会で役立つ具体的な場面や事例をできるだけ紹介するように心がけています。

42. 男性・理系・7年

以前はパワーポイントなどの資料を教室のスクリーンへ投影して、その説明をしながら、授業を進行していました。最近では、ホワイトボードいっぱいに板書をしながら、説明をして、そして、補足内容もまた板書しています。何が良いのか、模索しつつ、答えは一意にならない事を想像しながら、授業をしています。

43. 男性・理系・8年

教員の努力ではなく学生の努力を最大限に引き出すことを念頭に置いています。教員が入念に準備して流れるように講義をしても右から左に抜けていきます。学生自身に調べさせ、お互いに評価させるような方法を履修人数に合わせて設計することです。

44. 男性・理系・10年

授業の基本や学生との接し方がわかっていない教員が見受けられます。教育学部の教員に学内研修を行っていただきたいです。

45. 男性・理系・10年

講義は、聴講する学生の立場で、知らないことを前提に作成し、自分が聴きたいレク

チャーにすることが重要かと思います。出席率が悪かったりしても自分に責任があると思いつながら構成を考えています。

46. 男性・理系・10年

板書なし、すべてパワーポイントです。毎年修正しながら改善に努めています。全くとらないもの、ノートのみに夢中になるものなど、学生のノートする力の違いが大きいのが悩みです。

47. 男性・理系・10年

講義中の学生の携帯電話使用について。

48. 男性・理系・10年

学生のニーズにあった講義ができているか、常に気にしている。

49. 男性・理系・10年

年度により学生の質が変わるため、私は講義ノートを作成せず、具体例を挙げながら授業を行うことで学生の理解度を一定に保つことが出来ている。

50. 男性・理系・10年

医学研究科の教員ですが、これまで講義について全く教育を受けたことがありません。自己流で講義をしています。このようなものが教員として講義を行うことに疑問を感じていますが、今のところクレームがないので続けています。教員になる際にFDが行われるべきだと思いますし、教育（FDなど）を受けたことによるインセンティブがあるべきだと思います。

51. 男性・理系・10年

まじめに授業をして欲しい。

52. 男性・理系・12年

- (1) 学生が講義を受ける「環境」を良くするように心がけている。音声面では、自分の声が学生に届くように配慮するだけでなく、学生の私語を徹底的に注意することも重要であると思う。私語を排除することで、学生の受講環境は格段に良くなる。その他、部屋が暑すぎず、寒すぎないようにすること、換気扇を忘れずに運転することも、勉強しやすい環境を提供することにつながる。窓やカーテンの開閉も、学生に手伝ってもらいながら、状況に応じて、適切な状態にするように心がけている。
- (2) 当たり前のことかもしれないが、「時間」を正確に守るように留意している。自分が毎回必ず時間通りに授業を開始・終了することで、まじめに勉強しようとしている学生の時間の無駄が省かれる。また、遅刻・早退する学生の自業自得が明確になる。時間が曖昧では、授業管理は、ままならない。
- (3) 環境や時間の管理をしっかりと行うことで、勉学に対して意欲的な学生にとって有益なことが、数多く生まれると考えている。

53. 男性・理系・13年

ゆとり教育を脱した学生に変わったこと = 生物（と化学）の既習内容が大幅に増えている、を正しく把握すべきことに気づいていない教員が多いのではないだろうか。分子生物学、細胞生物学などB1,2対象の生物系基礎科目は従来然の内容では高校生物履修者にとってかなりの部分が復習となる（少なくとも基礎的概念やしくみは既習）。一方で、高校生物履修者と未履修者（=生物基礎のみ履修）の既習度の違いによる理解力の差を当初は心配した。そこで毎回の講義で理解度と既習度を調査、試験結果も分析したが、開講時に未履修者へ高校参考書を紹介し生協書店に並べてもらった程度で別途補習などの対応までは必要なかった。つまり、毎回の既習度には両者で明らかな開きがあったが、期末試験の最上位者の半数は生物未履修者であったし、平均得点率の差も5%程度であった。考察するに、理系学生はほとんどが高校化学を履修しており、これも大幅に学習内容が増えたことで理科全般に対する学習センスや科学的思考法の基礎力が向上し、未習分野にも取り組みやすいのかもしれない。このことをきちんと理解し、うまく講義内容を高度化、深化できれば

54. 男性・理系・13年

講義は教員のライブ・コンサート。ライブに来てくれた聴衆（学生さん）が求めていることを提供（講義）する。お客さんを講義に参加させて楽しませ、自分も楽しむ。これに尽きます。学生さんが100%楽しんでくれるためには、自分が200%楽しまない。ワイヤレスマイクを持って、客席を縦横無尽に駆け巡ると良いでしょう。

55. 男性・理系・14年

遅刻や授業中の居眠りなどされると頭に來ますし、やる気もなくなりますが、そういう学生が目立って見えてしまうだけで、そうでない学生が意外と楽しみにしてくれているのは知っておくべきだと思います。楽しみにしてくれる学生のために準備をするのは前向きになれますし、自身にとってもよい経験の積み上げになります。他のことが多く教育が軽視されがちな社会なのかもしれませんが、そこを少しがんばって工夫をしていくことを忘れなければ、未来を背負ってくれる彼ら彼女らは将来きっと応えてくれると思います。悩んでいる若い先生には、今こそ教育が大切な仕事であることを誇りに思ってもらいたいです。

56. 男性・理系・14年

板書を基本にします。画像を使うときはパワーポイントを使用します。

講義資料は、やや詳しい目のものを用意します。意欲のある学生だけでも読んでくれたらいいと思います。

授業中の私語は、授業のじゃまになったら注意します。

最近スマホ等で友人とやりとりしているようで、私語は減っていると思います。ス

マホ等を使っていることは気になりますが放置しています。

出席はとりません。時間ももったいないです。

宿題は、次回の授業の始めに解説をして自己採点させ、回収します。その時点が閉めきりです。授業中は新しい内容を聞いてほしいですから、授業中に宿題をやって終わってから提出されたものは大幅に減点します。

57. 男性・理系・15年

講義をきっかけとして、啓発されて自学自習へ進んでいくことが理想的であると考えています。

58. 男性・理系・15年

学生の心に響く講義をしたいと願っているが、なかなか難しい。根源的な疑問、問いをぶつけて、講義内容がそこへのアプローチとして感じられるように心がけている。

59. 男性・理系・15年

大学の講義は型にはめて必要事項を詰め込めばよいというわけではなく、学生に探求心を芽生えさせ、自己学習を活発にさせることが重要と考えます。最近では、パワーポイントで講義をする人も多く、講義資料も昔に比べると格段に整理されているとは思いますが、それが逆に、学生の探求心をそぎ、それだけを勉強していればよいと単位取得だけを目指した学生を増やしているのではないかと危惧しています。

60. 男性・理系・17年

講義資料として、穴埋め式の講義ノートを配布（生協で実費購入）して、講義内容でどこがポイントかがわかるように講義しています。また、宿題をほぼ毎回だし、提出された問題形式のレポートは、できるだけチェックして返却するようにしています。

61. 男性・理系・20年

およそ200名の学生を対象とする授業の場合、学生のレベルがまちまちであるので、どの学生のレベルに合わせて授業を進めるか、悩ましい問題となっている。

62. 男性・理系・20年

心を込める。言葉をはっきり明瞭に発音する。

 **グループV：男性文系**

63. 男性・文系・20年

教える技術というもの、経験を積んでもそう簡単に向上するものではないと感じます。

64. 男性・理系・20年

伝えたい事ではなく、訪ねたいことです。

受講生は様々ですが、「受講生の”考え”、”思考”をいかに言葉にして引き出すか？」のいい方法を教えてほしい。

65. 男性・理系・20年

学生に実物を見せる。

66. 男性・理系・20年

凄く良い、学生のためになる授業をしても、逆に最低限のいい加減な授業をしても、評価は同じ。授業数の多さだけが評価される？ような仕組みで、誰が熱心に授業を考えるのでしょうか？

67. 男性・理系・20年

私自身は男性ですが、女性の非常勤講師の方と共同で授業を数年間行った経験があります。教壇に立っている先生が女性であるというだけで、私語をしたりする学生が多い傾向があるかもしれませんが、厳しく注意するなど、毅然とした態度で臨むことで、かなり解消できるように思われます。

68. 男性・理系・20年

行灯(ランプシェード)など、できるだけ実物を使って現象を説明できるよう心掛けている。

69. 男性・理系・21年

聴講する学生数が少なければ大丈夫ですが、40名を超えるとコントロールが出来ない印象を持っています。こちらの目が届かなくなります。何か工夫しておられる事があれば知りたいです。

70. 男性・理系・22年

演習等を積極的に取り入れ、講義時間を有効に使うようにしている。
理論・方法論・手順等の背景・狙いを補足説明するようにしている。

71. 男性・理系・23年

昨今大学が専門学校化してきて授業評価や他の視線を気にすることが多くなった。それ自体は必要なことと思うが、過剰に反応しすぎていると感じる。大学の教育は単なる知識や技術の伝達ではなく、人としての生き方を深めることに意義があると考えており、教員の生き方や講義姿勢を見て(いわゆる後ろ姿を見て)感じ取ってもらうことが重要との信念でやってきた。

最近の学生は出席率が良くしておとなしくて時代の表面的な評価に流されている感が強い。自身がそのような時代の流れにそぐわない古い存在になりつつあることを実感しているが、教員の個性がもっと発揮できる大学本来の姿を期待したい。

72. 男性・理系・23年

授業の工夫はさまざまでしょう。だけど、死んだ魚のような学生の目が輝くときがあります。そのとき、授業内容が彼ら彼女らの琴線に触れてストンと中に入ったことを感じます。今日はいまうまくいなくても、問題意識を持って工夫を続ければ、そんなご褒美も増えてきます。お互い頑張りましょう。

73. 男性・理系・25年

準備や服装

74. 男性・理系・25年

自分の授業がどの程度学生に理解されているか把握することが難しい。

学生の受講態度をどの程度注意すべきか迷う。

学生の服装に関して、男女とも実習に適していない服装を注意する点はどのラインが常識か迷う。

75. 男性・理系・25年

講義ノートは丁寧に作成しました。それを使って講義をしますが、講義の間に気をつくこともあります。TAの学生には、それを記録してもらうようにしました。そうして出来上がった講義ノートをもとに、先日、教科書を出版しました。

76. 男性・理系・25年

最近の教育のあり方については、学生に対するアンケートなどから、わかりやすく、やさしく、しかも興味が湧く授業や演習が求められる傾向があるが、学生のわがままのように思える。それはそれとして講義のレベル維持や、学生の学力向上のためには厳しさや、理解の困難さも厭う必要はないと思う。そもそも勉強していない学生、そのための学力不足学生が多いと感じる。

77. 男性・理系・26年

講義はできるだけプレゼンソフトで行ない、そのファイルはいつでも見れるようにしておく。しかし、準備はたいへんである。出席はとらない。やる気が無いのに出席点だけ欲しいような学生を排除するため。試験は問題をあらかじめ公表し、本番は数字などを変えるだけ。レポートは丸写しが横行するので、行なわない。

78. 男性・理系・27年

助教のため、講義を担当したことはございません。従って、上記は、分担している実験に関することとして記入致しました。講義云々などに関しまして、おこがましくて、僕などには語る事など全くございません。

79. 男性・理系・27年

「私語摘発1回につき、試験の得点から10点の減点」と第1回目の講義で宣言します。効果絶大です。

80. 男性・理系・28年

大人数の授業（例えば150人程度）での授業の工夫について知りたい。

81. 男性・理系・30年

- ・受講生諸君の授業内容への興味をいかに引き出すかが極めて重要。
(学生諸君の大学志望理由が必ずしも専門分野への興味とは限らず、偏差値や先生・の意見による場合も多いので、後付けでもよいので興味を引き出す必要がある)
- ・そのために、授業内容に関連するネット情報、テレビ番組等の参考情報について、積極的に提供している。
- ・特に技術開発における苦労話や、いかにしてヒット製品が生まれたか、ステー

ブ・ジョブズの足跡など、学生諸君が興味をもつビデオを授業時間外に放映して、興味をもつ学生には感想レポートの提出を求めている。

・ティーチングスキルについては、「成長するティップス先生」が参考になる。

82. 男性・文系・1年

学生に評価方法などのルールを事前に提示し、裁量的な評価方法はなるべく避ける。裁量的になってしまうと、学生が疑心暗鬼になり教員を信頼しなくなる。信頼できない教員からは学ぼうとする意欲が減ずる。

83. 男性・文系・1年

来学期からいわゆる「反転授業」を試してみたいと思います。 <http://bit.ly/2ia7HUt>

84. 男性・文系・4年

パワポと板書のバランス

85. 男性・文系・7年

ゼミ生や他学部生だからといって無意識に点数が甘く（厳しく）なるのを防ぐため、採点の際には氏名などが見えなくなるように答案用紙を綴じています。予断を持たずに採点できるため、性に合っているようです。

86. 男性・文系・9年

科目を担当する以上はわかりやすい授業として、伝え方、ツールを工夫している。学生が集中しやすい環境づくりをいかに維持し、工夫しながら行っている。履修者数にもよるが、私語や遅刻、早退に関することはシラバスに明記し、授業でも何回か口頭で伝達している。

できるだけ、頭と手を使って考えさせる授業を意図的に行っている。ワークやグループディスカッションを数回行うこと、場合によっては席替えをとして、指定席に座るようにしている。

パワーポイント、レジュメについては穴埋めにして、手で書かせるようにしている。講義とワークを交えて、意見交換をできるだけ行って、そこから掬い上げるようにして反映している。

87. 男性・文系・16年

パワーポイントを使う授業では、板書のときよりも内容が多くなる傾向があり、学生の方でも消化不良になっているのではないかと感じるがあった。そのため、同じ内容を別の言い方で説明しなおしたり、少し冗長なくらいに説明して内容を減らすように（板書のときと同じくらいになるように）している。

88. 男性・文系・20年

入学時に学生が持っていた興味を失わずに、それを高め、当該分野を勉強してよかったと思って卒業してもらいたい。当たり前のことですけど。

89. 男性・文系・23年

一方的に講義するのではなく、学生に質問して答えさせるような対話型の授業をするよ

うに心がけてきた。

90. 男性・文系・35年

学生による授業評価が始まった頃、学生の日を見るのを避けていると指摘され、今はときどき学生の眼を見て話すようにしている。高校等では板書が教員によってきれいになされているのか、多く板書はするが整理されていないと指摘された。よってできるだけきれいに、整然と板書するように努めている。最近の学生は評価方法に敏感になっているように感じる。90点以上のSの評価ができたかもしれない。評価方法はできるだけ明確にするようにしている。

 **グループⅥ：男性・その他**

91. 男性・その他・2年

定期的に学内で「分かりやすい講義」の実施について勉強会を実施しており参加している。自分の講義に対する助言だけでなく、他の教員の講義に対する工夫等知ることが出来、良い学びの場となっている。

付録

技術ノート「あなたの声量は十分ですか？」

講義の声が講義室の後方まで十分に届いているかどうか気になったことはありませんか？音声明瞭度について研究されている神戸大学大学院工学研究科・佐藤逸人准教授に、携帯端末を使って簡単にチェックできる方法を伺いました。

携帯端末を用いた講義時の聴きやすい声量の チェック方法

神戸大学大学院工学研究科准教授 佐藤 逸人

チェックには市販の「騒音計アプリ」を利用します。アプリのダウンロードは有料ですが、測定には課金されません。

1. 必要なアプリの性能

- ① A特性（A-WeightingやA-Filterと表記されている）が使用できるもの。
- ② Slow特性が使用できるもの。（メーターの応答速度のことで、SlowとFastを選択できるようになっている場合が多い。）
- ③ マイクロホン等の仕様が定まっているiPhone / iPadが望ましい。Androidは測定誤差が大きい場合があるので要注意。

例) Studio Six Digital、SPL Meter ¥120-

iTunesストア：<https://itunes.apple.com/jp/app/spl-meter/id309206756?mt=8>

関連文献：<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90002664.pdf>

2. アプリの設定

騒音計アプリを「A特性」と「Slow」に設定して下さい。

3. 声量のチェック方法

チェックの方法はマイク等の拡声設備を使うかどうか、チェック時に協力者がいるかどうかによって異なります。また、声量が十分かどうかは、「音圧レベル（単位：dB（デシベル））」というものさしを使って判定します。

Case 1：拡声設備を使用しない場合

一人でチェックする方法と協力者と共同でチェックする方法があります。可能であれば、後者を推奨します。

(ア) 一人でチェックする方法

- ① 携帯端末を自分の口元から30 cm程度離して固定してください。±3 cm程度のズレであれば音圧レベルの測定誤差は1 dB以下です。
- ② 講義で普通に話す程度の声の強さで発声し、アプリに表示される音圧レベルの平均的な値を読み取って下さい。個人差がありますが、70 ~ 80 dBが「やや声を張った」場合の一般的な声量の範囲です。

- ③ 音圧レベルが70 dBの場合、5 m以上離れた席では講義が聴き取れなくなる場合もあります。講義室の大きさに応じて拡声設備を用いるか、のどを痛めない範囲で音量を大きくしてください。
- ④ 音圧レベルが80 dBの場合、10 m以上離れた席では講義が聴き取れなくなる場合もあります。多くの場合問題は生じないと思われませんが、広い講義室では拡声設備を用いて下さい。

(イ) 協力者と共同でチェックする方法

- ① 講義が聴き取りにくいと想定される席の近くで携帯端末を用いて協力者が音圧レベルを確認します。
- ② 講義で普通に話す程度の声の強さで発声し、協力者がアプリに表示される音圧レベルの平均的な値を読み取って下さい。
- ③ 60～70 dBが聴きやすい音圧レベルです。

Case 2：拡声設備を使用する場合

この場合、1人では確認できません。協力者が必要です。

- ① 講義が聴き取りにくいと想定される席の近傍で携帯端末を用いて協力者が音声レベルを確認します。
- ② 講義で普通に話す程度の声の強さで拡声設備を通して発声し、協力者がアプリに表示される音圧レベルの平均的な値を読み取って下さい。
- ③ 60～70 dBが聴きやすい音圧レベルです。このレベルよりも低い場合は、以下の優先順位で調整してください。
 - (i) マイクロホンの位置を口に近づける
 - (ii) のどを痛めない範囲で音量を大きくする
- ④ 通常、マイクロホンの感度はハウリング（スピーカがキ～ンという音を出す現象）を考慮して最適値に設定されているので、拡声設備のマイクロホン感度のつまみを調整して音圧レベルを高くすることは推奨されません。
- ⑤ 大講義室や多目的ホールなどの大空間では、残響音の影響で60 dBでは音量が不足する場合があります。

4. 注意事項

以上示した数値は、講義室の騒音が40 dB程度であると想定した場合の目安です。空調設備やプロジェクター等の動作音の影響で騒音が40 dBよりも大きい場合、その増分と同じだけ音圧レベルを高く保つようにしてください。

女性研究者研究活動支援事業（連携型）

New Horizons 「Teaching Skill Up」

発行 2017年3月

編集 国立大学法人 神戸大学

学校法人関西学院 関西学院大学

公立大学法人 兵庫県立大学

URL <http://www.office.kobe-u.ac.jp/opge-kyodo-sankaku/renkei/index.html>

